

県道大浜仁尾線道路改良事業及び県道西植田高松線道路改良事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

家の浦遺跡・川島本町山田遺跡

2007. 3

香川県教育委員会

県道大浜仁尾線道路改良事業及び県道西植田高松線道路改良事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

家の浦遺跡・川島本町山田遺跡

2007. 3

香川県教育委員会

序 文

家の浦遺跡は香川県三豊市仁尾町に所在する遺跡で、県道大浜仁尾線道路改良事業に伴い香川県土木部からの依頼によって香川県埋蔵文化財センターが平成18年度に発掘調査を実施しました。その結果、中世前半を中心とする掘立柱建物跡を含む集落跡を検出することが出来ました。また出土した遺物には近畿地方で生産された瓦器が多く含まれるなど、他地域との交流を示す遺物が出土しています。

また川島本町山田遺跡は、県道西植田高松線道路改良事業に伴い発掘調査を行いました香川県高松市川島本町に所在する遺跡です。本遺跡も香川県土木部からの依頼により香川県埋蔵文化財センターが平成18年度に発掘調査を実施しました。その結果、縄文時代後期と弥生時代前期の土坑、古代の溝状遺構を検出しました。特に古代の溝状遺構は条里地割と関連するもので、古代の開発を示す資料として貴重なものです。

家の浦遺跡、川島本町山田遺跡とも整理作業は、発掘調査を行った平成18年度に実施し、このたび『県道大浜仁尾線道路改良事業及び県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　家の浦遺跡・川島本町山田遺跡』として刊行することになりました。

本報告書が香川県の歴史を知るための基礎資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

香川県埋蔵文化財センター

所長 渡部 明夫

例　　言

1. 本報告書は、県道大浜仁尾線道路改良事業及び県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県三豊市仁尾町家の浦に所在する家の浦遺跡（いえのうらいせき）と香川県高松市川島本町に所在する川島本町山田遺跡（かわしまほんまちやまだいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部道路課から依頼され、香川県教育委員会が調査主体、香川県埋蔵文化財センターが調査担当者として実施した。
3. 本書に収録した地区の発掘調査は家の浦遺跡を平成18年4月～5月に、川島本町山田遺跡を平成18年8月に実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

森 格也・中村大地

4. 現地での発掘調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

家の浦遺跡：香川県西讃土木事務所、地元自治会、地元水利組合、円明院住職・武田耕道

川島本町山田遺跡：香川県高松土木事務所、地元自治会、地元水利組合

5. 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。本報告書の執筆・編集は森 格也が担当した。

6. 本報告書で用いる方位の北は世界測地系の北であり、標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準としている。

また、遺構は下記の略号により表示している。

S B　掘立柱建物跡　　S D　溝状遺構　　S K　土坑　　S P　柱穴・小穴

7. 挿図の一部に国土地理院地形図「仁尾」(1/50,000)、「高松南部」(1/25,000)、国土地理院国土基本図「IV-F E 52・53」、「IV-F F 23・33」(1/5,000)を使用した。

8. 本報告書の石器実測図の網目は摩滅痕を、輪郭線の周囲の実線のうち矢印のものは摩滅・擦痕、使用痕の範囲を、実線の先端部が矢印でないものは敲打痕の範囲を示している。

9. 遺物観察表は以下の基準で作成している。

「残存率」は図化した部分についての残存率であり遺物全体に対するものではない。また口径が1/8以下、あるいは算出不能のものは「細片」と記している。

「色調」は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1998年度版』による。

「胎土」は含まれる鉱物・岩石の径と量を、以下の組み合わせで記載している。また特殊な鉱物・岩石については別途記載している。

微：径0.5mm以下　　細：径0.6～1.0mm　　中：径1.1～3.9mm　　粗：径4.0mm以上

多：非常に多く含む　　普：一定量含む　　少：少量含む

なお、磁器・瓦器については「緻密」と記載している。

10. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高を示している。単位はメートルである。

本文目次

家の浦遺跡

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	3
第3節 整理作業の経過	3
第4節 調査体制	3

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4

第3章 調査の成果

第1節 調査区の概要と土層序	11
第2節 遺構と遺物	11

第4章 まとめ

第1節 遺構について	16
第2節 遺物について	16
第3節 遺物の流通について	17

川島本町山田遺跡

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	23
第2節 調査の経過	25
第3節 整理作業の経過	25
第4節 調査体制	25

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	26
第2節 歴史的環境	26

第3章 調査の成果

第1節 調査区の概要と土層序	30
第2節 遺構と遺物	32

第4章 まとめ

遺構の変遷	35
-------	----

挿図目次

家の浦遺跡

第1図 遺跡位置図	1
第2図 家の浦遺跡周辺図	2
第3図 調査区位置図	2
第4図 周辺遺跡位置図	5
第5図 調査区地形図	7
第6図 1区南壁土層図	8
第7図 2区北壁土層図	9
第8図 遺構平面図	10

第9図 SB01平・断面図	11
第10図 SB02平・断面図	12
第11図 SB03平・断面図	12
第12図 SK01平・断面図	13
第13図 SD01平・断面図	13
第14図 SD01出土遺物	14
第15図 1区包含層出土遺物	15
第16図 2区包含層出土遺物	15

川島本町山田遺跡

第17図 遺跡位置図	23
第18図 川島本町山田遺跡周辺図	24
第19図 周辺遺跡位置図	27
第20図 調査区土層断面図	30
第21図 遺構平面図	31
第22図 SK01平・断面図、SK02平・断面図、SK02出土遺物	32

第23図 SK03平・断面図、出土遺物	33
第24図 SK04平・断面図、出土遺物	33
第25図 SK05平・断面図	34
第26図 SD01平・断面図、出土遺物	35
第27図 高松平野南東部の条理地割と周辺遺跡	36

図版目次

家の浦遺跡

図版1 調査前遠景 南から	
調査前遠景 北東から	
図版2 1区全景 北東から	
1区中央全景 東から	
図版3 1区西側SD01検出面全景 南東から	
1区西側全景 南から	
図版4 1区中央遺構検出状況 手前SB01・SK01、向う側SB02・03 北東から	
1区SD01完掘状況 南から	

図版5 SD01断面B-B' 北から	
SD01断面C-C' 北から	
1区西側土層断面② 北から	
2区中央土層断面⑤ 南から	
2区東側全景 南から	
図版6 2区中央全景 南東から	
2区中央全景 北東から	
図版7 2区西側SD01検出面全景 北東から	
2区西側全景、土層断面⑥ 南から	
図版8～11 出土遺物	

川島本町山田遺跡

図版12 調査前遠景 南西から	
調査区全景 東から	
図版13 調査区全景 北から	
SK01～03完掘状況 南東から	
図版14 遺構検出状況 東から	
SK02断面 西壁部分 東から	

SK04断面 B-B' 南から	
SD01断面 B-B' 東から	
SD01完掘状況 東から	
図版15 SD01完掘状況 西から	
SK04完掘状況 北から	
図版16 出土遺物	

県道大浜仁尾線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

家の浦遺跡

2007. 3

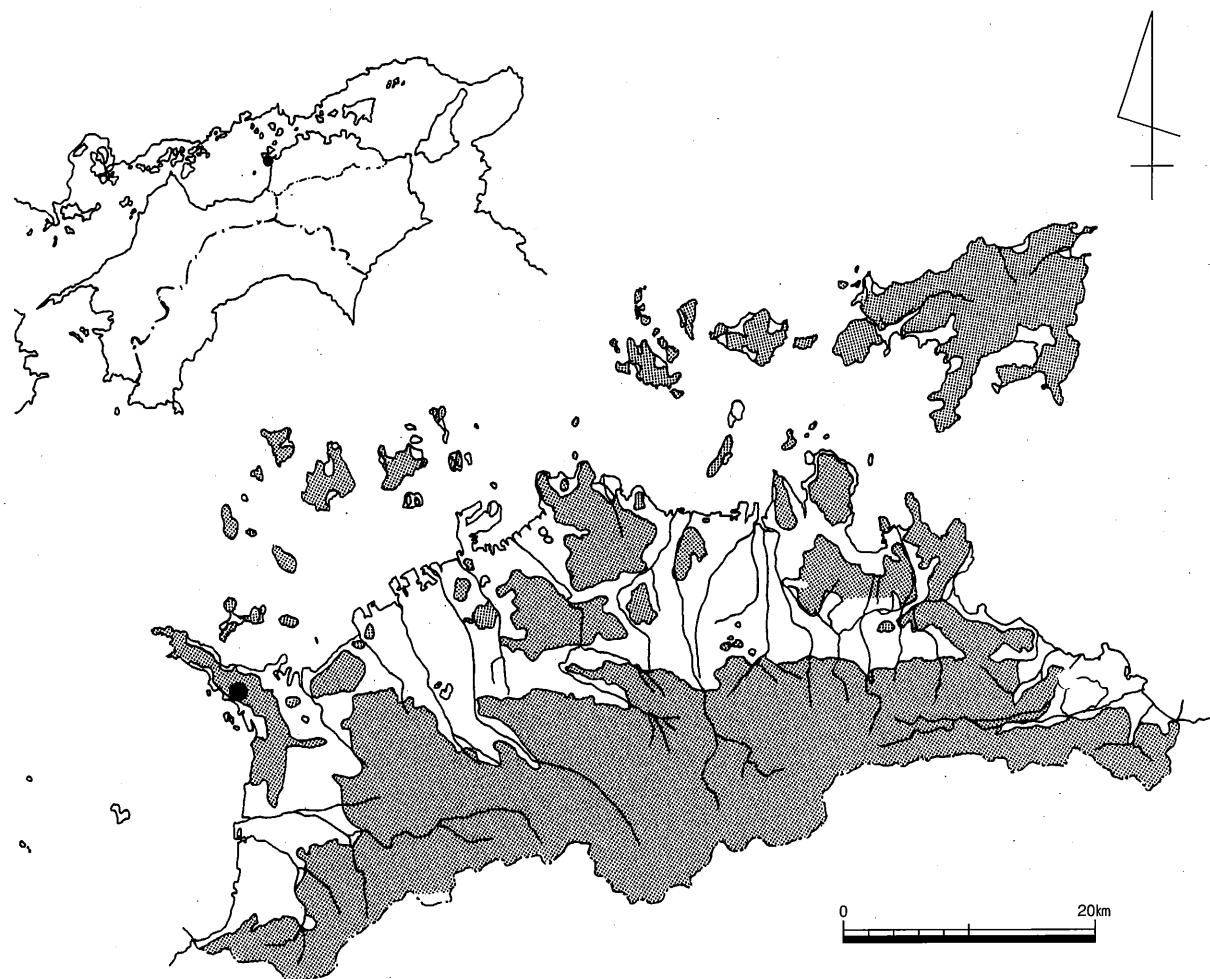
香川県教育委員会

第1章 調査に至る経緯と経過

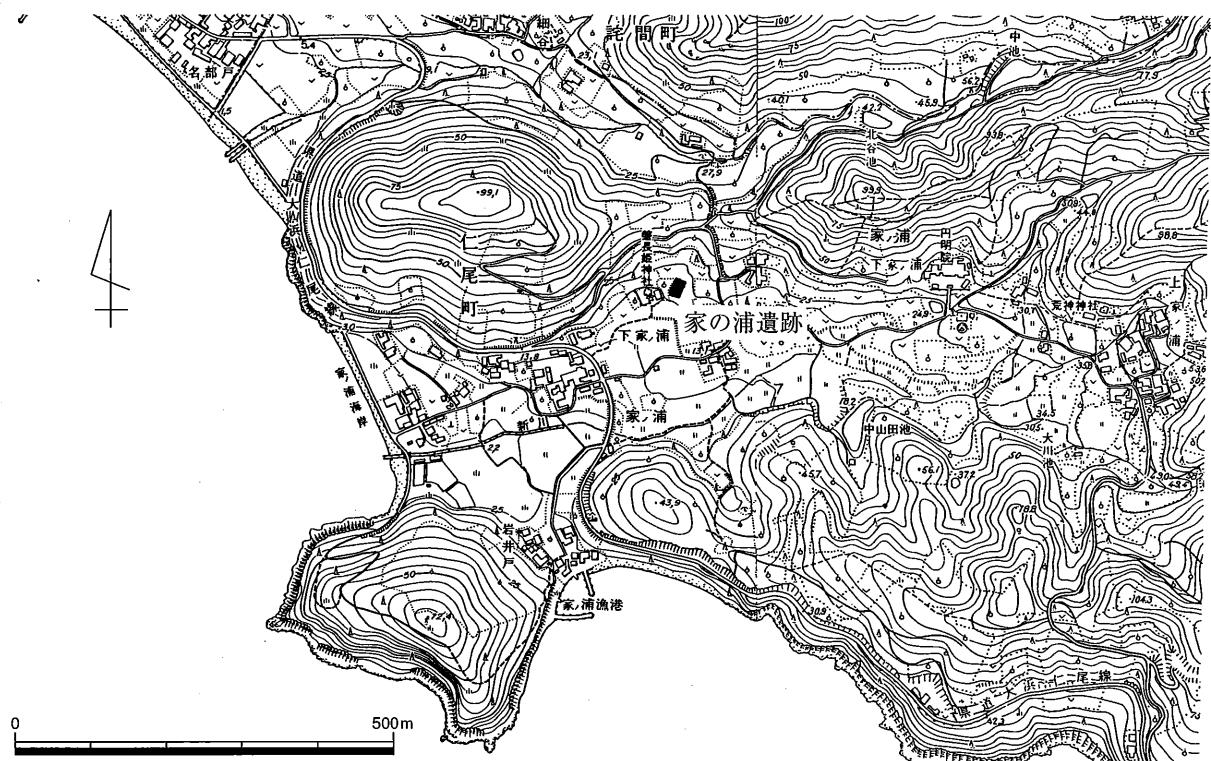
第1節 調査に至る経緯

県道大浜仁尾線は三豊市詫間町大浜と三豊市仁尾町仁尾を結ぶ路線で、莊内半島の西側の海岸際に沿って走っている。しかし道幅は狭く自動車が対向するにも困難な箇所が多かったため、道路を拡幅して対向2車線化を順次図っているところで、平成16年度までに三豊市仁尾町の中心部から仁尾町家の浦地区の入口までは工事が完成していた。この先、道路は家の浦地区から三豊市詫間町名部戸地区にかけて独立丘陵の西側の斜面を海岸に沿って走っているが、改良工事はこれまでの現道の拡幅ではなく、独立丘陵の東側の尾根を削って名部戸地区に至る新規バイパス路線として計画された。

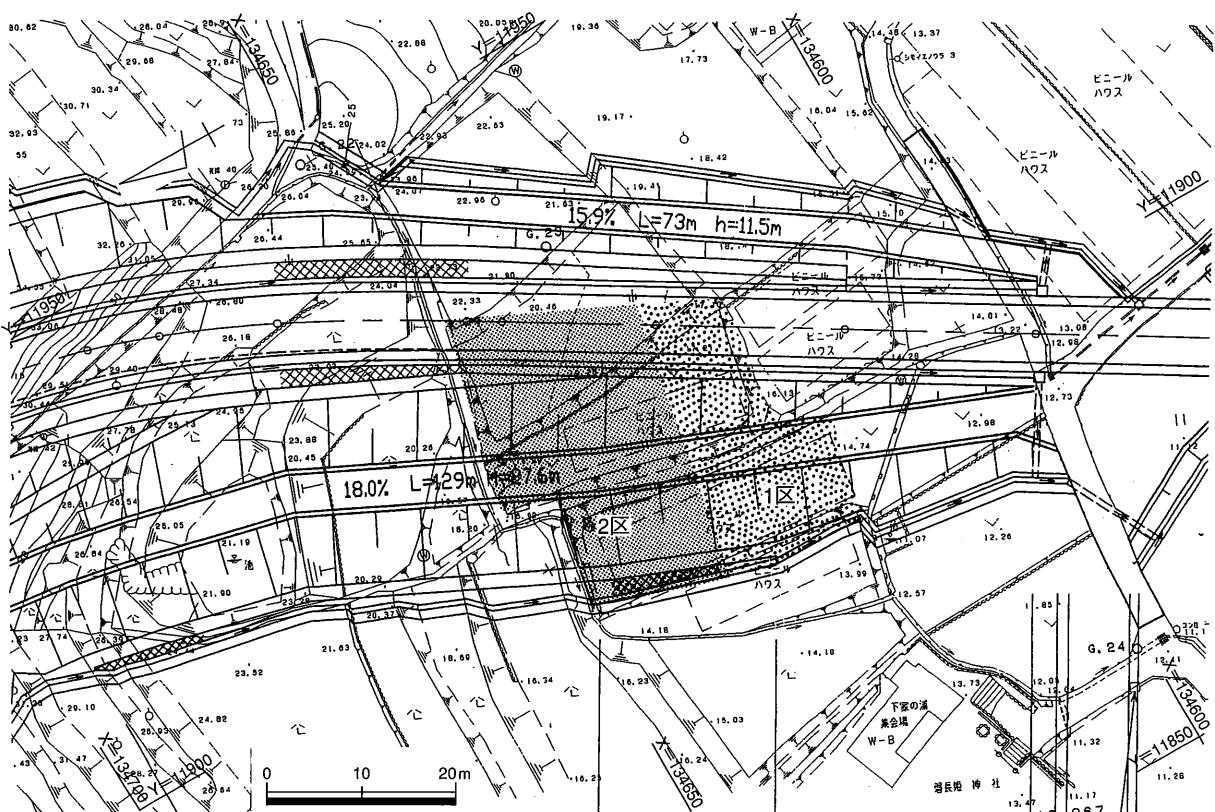
このことをうけて香川県教育委員会事務局文化行政課は、莊内半島では縄文時代や中世の遺跡が比較的多く周知されていることや当該地の地形なども考慮にいれて、埋蔵文化財の有無を確認するために、平成17年6月9日と8月11日の2回にわたり試掘調査を実施した。その結果、山裾部分を中心に中世や縄文時代と考えられる遺物が出土したことから、文化行政課と香川県土木部道路建設課（現道路課）及び香川県西讃土木事務所との間でその保護措置について協議したところ、遺物が比較的多く出土した箇所を中心とした916m²について発掘調査を実施することで合意した。



第1図 遺跡位置図 (1/600,000)



第2図 家の浦遺跡周辺図 (1/10,000)



第3図 調査区位置図 (1/800)

発掘調査は香川県教育委員会を調査主体、香川県埋蔵文化財センターを担当者として次年度である平成18年4月～6月の予定で実施することとなった。

第2節 調査の経過

発掘調査は調査対象地を南北に2分割して南側を1区、北側を2区と命名し、平成18年4月14日に1区から調査を開始した。しかし調査対象地の大部分は近年になり畠地やビニルハウスを設営するためには平坦に整地されており、その遺構面の大部分が削平されていることが判明し、検出した遺構は僅かであった。また調査区の西側は谷地形の底部に近いことや、試掘の結果から遺物が比較的多く出土するものと見込まれた。しかし調査区内ではまだ谷地形の途中にあたることが判明し、遺物の出土も少なかつた。

以上のような状況から、発掘調査は当初予定より早く終了することとなり、埋め戻しを含めて平成18年5月31日に発掘調査は終了した。

第3節 整理作業の経過

現地での発掘調査の終了後、香川県埋蔵文化財センターで整理作業を実施し、発掘調査報告書を作成した。出土遺物の洗浄は現地で終了していたため、遺物の注記作業から開始した。遺物の接合・実測、遺構・遺物図面のトレース、レイアウト、遺物写真撮影、原稿執筆、編集を行い、平成18年7月31日にすべての整理作業を終了した。

第4節 調査体制

発掘調査、整理作業、報告書刊行業務は香川県埋蔵文化財センターが以下の体制で実施した。

香川県埋蔵文化財センター

総括	所長	渡部明夫	調査課	課長	廣瀬常雄
	次長	榎原正人			
総務課	課長	野口孝一	文化財専門員	北山健一郎	
	主任	嶋田和司	文化財専門員	森 格也	
	主任	田中千晶	嘱託 (土木)	高嶋勝英	
			嘱託	中村大地	

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

香川県の西部で細長く直線にして12kmほど瀬戸内海に突出している荘内半島は、紫雲出山・横峯山・妙見山など300m前後の山が連なり、海岸線近くまで急峻な地形が迫っている箇所が多い。地質学的には花崗岩が基盤となっており、その上に安山岩や角礫凝灰岩が乗る開析溶岩台地状になっている部分が見受けられる。変化に富んだ海岸線の入り江を利用して、積・生里・大浜・家の浦などの漁港が多く見られる。そして急峻な山地の谷筋から海に向かって扇状地を形成し、海岸付近で狭小な平地部を作り出している。

今回、発掘調査を行った家の浦遺跡は燧灘に面した荘内半島の西側の付け根付近に位置しており、海岸線から約400mのところにある。遺跡の北側一帯に連なる丘陵の斜面地にあり、丘陵の谷筋の一部がかかっている。遺跡の標高は遺構面で12.0m～20.2mほどで東から西に向かって傾斜しており、比高差は8.2mほどである。また遺跡の南側には、標高319.9mの妙見山から派生する丘陵から流れ出た新川の作り出す扇状地が広がっており、氾濫を繰り返している。

第2節 歴史的環境

家の浦遺跡を含む荘内半島には、今のところ旧石器時代の遺跡や遺物は知られていないが、縄文時代の遺跡は古くから多数知られている。縄文時代早期には三豊市仁尾町の小鳶島遺跡と三豊市詫間町の本村中遺跡がある。小鳶島遺跡では貝塚を伴い、主に山形文・楕円文を中心とした押型文土器が出土している。本村中遺跡では主にポジティブな楕円文の押型文が主に出土している。前期では三豊市仁尾町の南草木遺跡がある。貝塚を伴い、前期後半の彦崎ZⅠ・Ⅱ式の土器を主体としている。またヤスと考えられる骨角器も出土している。中期では三豊市詫間町粟島の東風浜遺跡と西浜遺跡があるが、両遺跡とも後期まで継続する。後期になると三豊市詫間町で遺跡数は増加し、大浜遺跡、蟻の首遺跡、船越遺跡、箱遺跡、生里遺跡、須田・中尾瀬遺跡などがあるが、中期に形成されて後期に主体となるものが多い。晩期には遺跡は激減し、西浜遺跡で僅かに突堤文土器が出土している。

弥生時代には中期になると標高352mの紫雲出山の頂上付近に紫雲出山遺跡が出現する。いわゆる高地性集落で、多量の土器とともに石鏃・打製石庖丁などの石器、骨角製の釣り針などが出土しており、貝塚を伴っている。同じく中期には三豊市詫間町北谷遺跡があり、家の浦遺跡の北東約4kmの山裾に位置している。終末期には南草木遺跡で竪穴住居跡が1棟検出されており、竪穴住居跡から甕・鉢・甌・製塩土器が出土している。

古墳時代では荘内半島の付け根の三豊市仁尾町と詫間町の境の加嶺峠に向かう山裾に加嶺大麻古墳がある。横穴式石室の一部が残っており、6世紀末の須恵器・土師器とともに耳環が出土している。古墳時代の須恵器と製塩土器が南草木遺跡で出土している。

古代には荘内半島一帯は三野郡詫間郷に属し、寛治四年（1090）には大鳶島が京都の賀茂神社の御厨となっている。当該期の遺跡としては三豊市詫間町船積寺跡があり、平安時代の創建とされている。隣接する経塚は大正時代に発掘され、和鏡や青磁盒などが出土している。また妙見山の山頂から南東に延びる尾根上の平坦地に妙見山遺跡があり、標高は300m前後である。手づくねの土師器と須恵器の杯が重ねられて埋納されており、祭祀遺跡と考えられるものである。

平安時代末～鎌倉時代にかけて県内でも荘園が多く成立している。荘内半島でも先端部近くに摂関家領三崎荘、荘内半島の東側の付け根部分に九条家領詫間荘、西側の付け根部分には石清水社領草木荘がそれぞれ成立している。仁尾・賀茂神社文書に収められている弘安元年（1278）閏十月十二日の治田藤原資畠放券に「詫間御庄仁尾村」と記載されているのを始め、同じく仁尾・賀茂神社文書に収められている觀応三年（1352）五月日の定円田畠譲状には「たくまのしやういえのうら」の記載があり、仁尾村や家の浦地区が詫間荘に含まれていたことがわかる。

さらに荘内半島は瀬戸内海に突き出ていることからも、その沿岸部は瀬戸内海航路を行き来する船舶で賑わいを見せていた。その中で、「兵庫北関入船納帳」と呼ばれる東大寺が設置した摂津国の大寺北



- | | | | | |
|-----------|--------------|------------|-------------|-----------|
| 1. 家の浦遺跡 | 2. 生里遺跡 | 3. 箱遺跡 | 4. 海崎城跡 | 5. 船積寺跡 |
| 6. 積新田遺跡 | 7. 紫雲出山遺跡 | 8. 船越遺跡 | 9. 大浜遺跡 | 10. 北谷遺跡 |
| 11. 妙見山遺跡 | 12. 須田・中尾瀬遺跡 | 13. 尾の上遺跡 | 14. 詫間城跡 | 15. 本村中遺跡 |
| 16. 田井遺跡 | 17. 蟻の首遺跡 | 18. 萬塚遺跡 | 19. 古江善光寺遺跡 | 20. 天神山城跡 |
| 21. 小鳶島遺跡 | 22. 仁保城跡 | 23. 加嶺大麻古墳 | 24. 南草木遺跡 | 25. 東風浜遺跡 |
| 26. 西浜遺跡 | 27. 栗島城跡 | | | |

第4図 周辺遺跡位置図 (1/100,000)

関に入関した船舶の記録が残されている。この記録は文安二年（1445）正月から同三年正月にわたるもので、この中に讃岐の船籍地が17箇所記載されている。そのうちの一つに「丹穂」があり、仁尾の地に港が築かれていたことがわかる。港は各地の物資が集まり経済活動の中心となっており、さらに賀茂神社の神人などが仁尾に居住し、当時の繁栄ぶりが窺える。

仁尾の港は上記のように経済的な拠点であつただけでなく、当時の讃岐国守護細川氏にとって瀬戸内海における軍事的な要衝で海上交通を把握するうえでも重要な地点であった。そのため守護御料所になり、香西氏が代官として派遣されたのである。

家の浦地区では、家の浦遺跡から東に約400mの位置に円明院という真言宗の寺院があり、延元四年（1339）に忍性による中興とされている。また家の浦遺跡の西側に隣接する、寛永十一年（1634）に再興された下家の浦の鎮守社である大将軍神社（磐長姫神社）の別当にもあたる。

三豊市詫間町須田・中尾瀬遺跡、本村中遺跡、積新田遺跡で中世の遺構と遺物が検出されている。このうち本村中遺跡では中世後半と考えられる掘立柱建物跡が2棟検出されている。また三豊市仁尾町古江善光寺遺跡では平窯跡の一部が検出され、15～16世紀の軒丸瓦・軒平瓦が出土している。

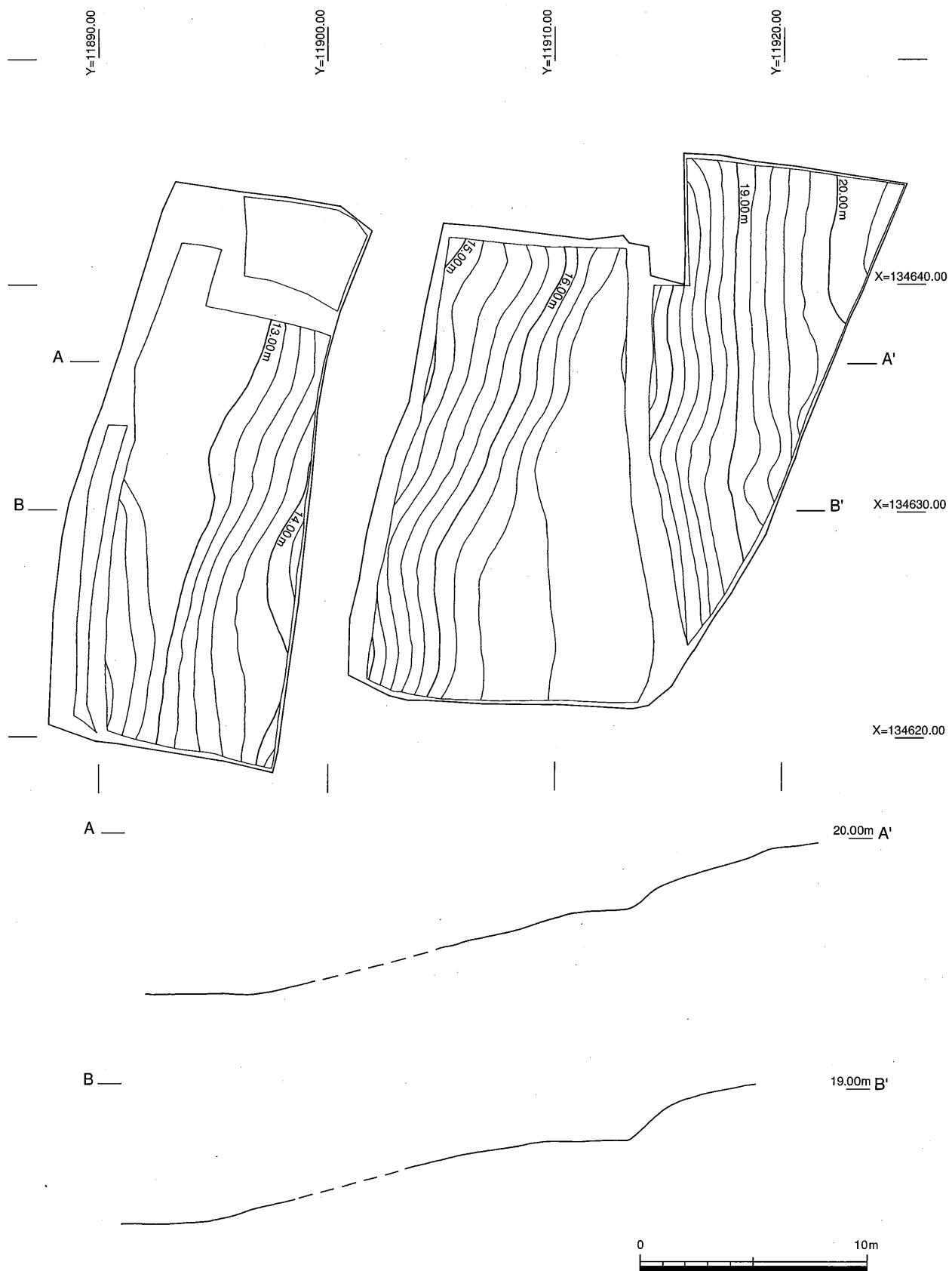
戦国時代になると荘内半島にも城館が築かれている。三豊市詫間町に詫間城跡、海崎城跡、栗島城跡が、三豊市仁尾町には仁保城跡、天神山城跡がそれぞれ築かれている。このうち海崎城跡は曲輪・堀切が現存している。筈御崎の開発領主であった海崎豊前守元村による築城とされる。

近世になつても仁尾は港町としてますます栄え、酒・醤油の製造や茶の販売など商工業も発達し、西讃地方の一大経済拠点として繁栄した。『金毘羅参詣名所図会』に当時の仁保の港と係留されている船や沖合いを航行する船の様子が描かれている。

近・現代になると海浜部に塩田が築かれ製塩業で賑わつたが、その塩田も昭和40年代に廃止されてい

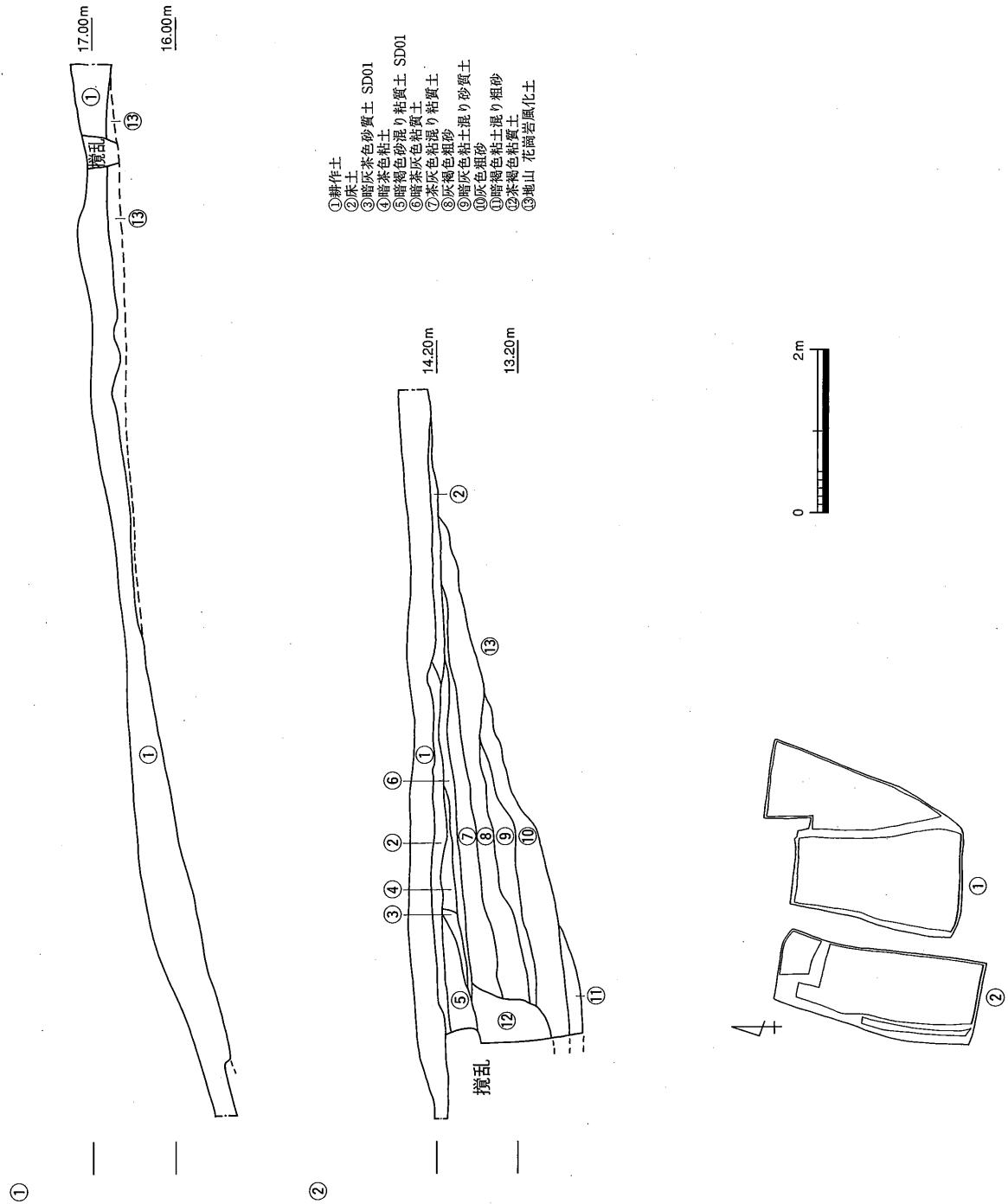
〈参考文献〉

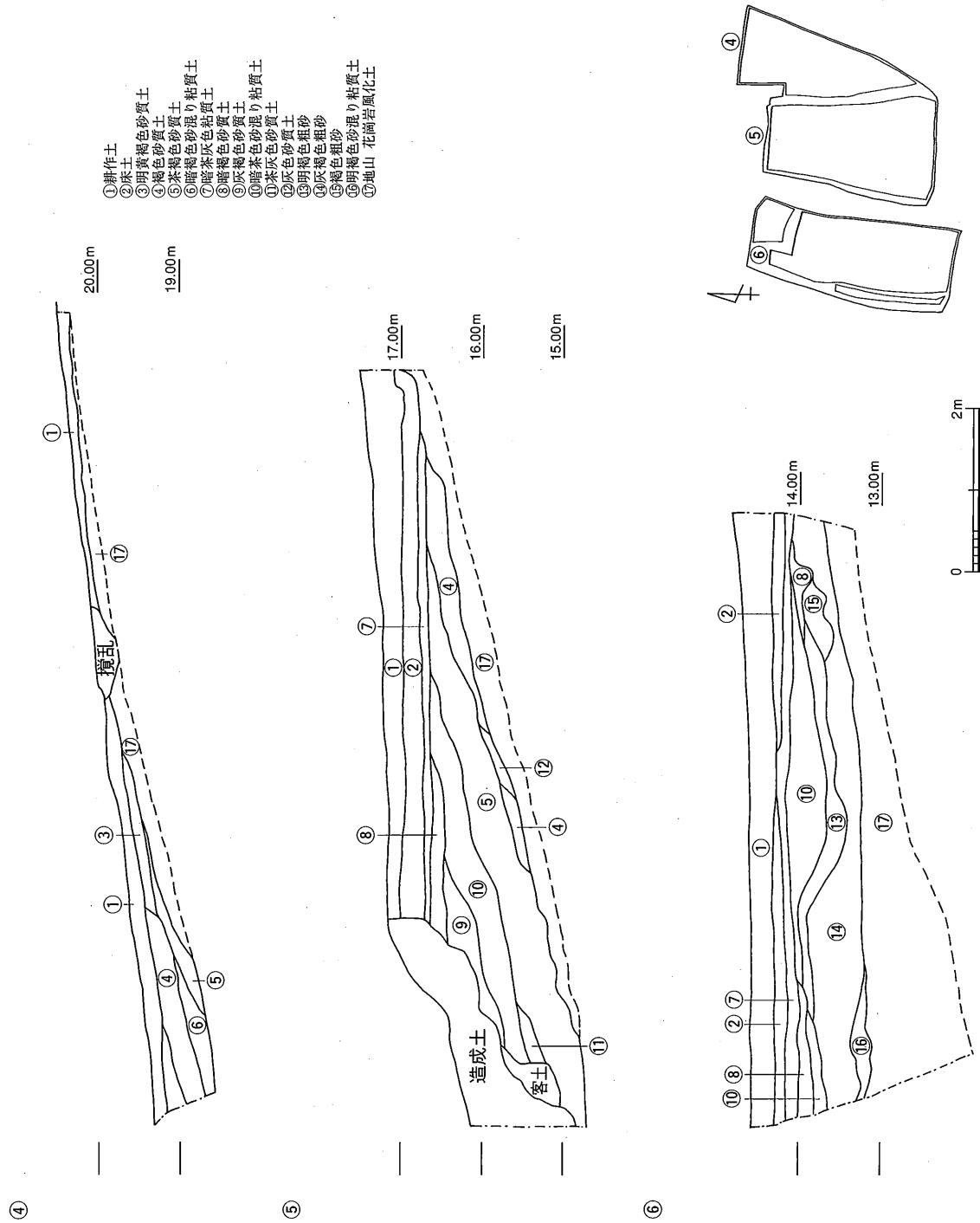
- 『新修 仁尾町誌』 香川県仁尾町 1984
- 『新修 仁尾町の文化財』 仁尾町教育委員会 2003
- 『新編 香川叢書 考古篇』 香川県教育委員会編集 1983
- 『香川県史 第二巻 中世』 香川県 1989
- 『香川県の地名』 平凡社 1989
- 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成4年度』 香川県教育委員会 1993
- 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成5年度』 香川県教育委員会 1994
- 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成8年度』 香川県教育委員会 1997
- 『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』 香川県教育委員会 2003
- 『香川の漁港』 香川県 2002
- 高橋邦彦『妙見山遺跡調査報告書』 仁尾町教育委員会 1973
- 伊沢肇一・森本義臣『大浜遺跡発掘調査概要』 詫間町教育委員会 1981
- 千葉幸伸「記録からみた古代・中世の漁業」『香川県漁業史 通史編』 香川県漁業史編纂協議会 1994
- 橋詰茂 編『内海順風』『中世の讃岐』 美巧社 2005



第5図 調査区地形図 (1/250)

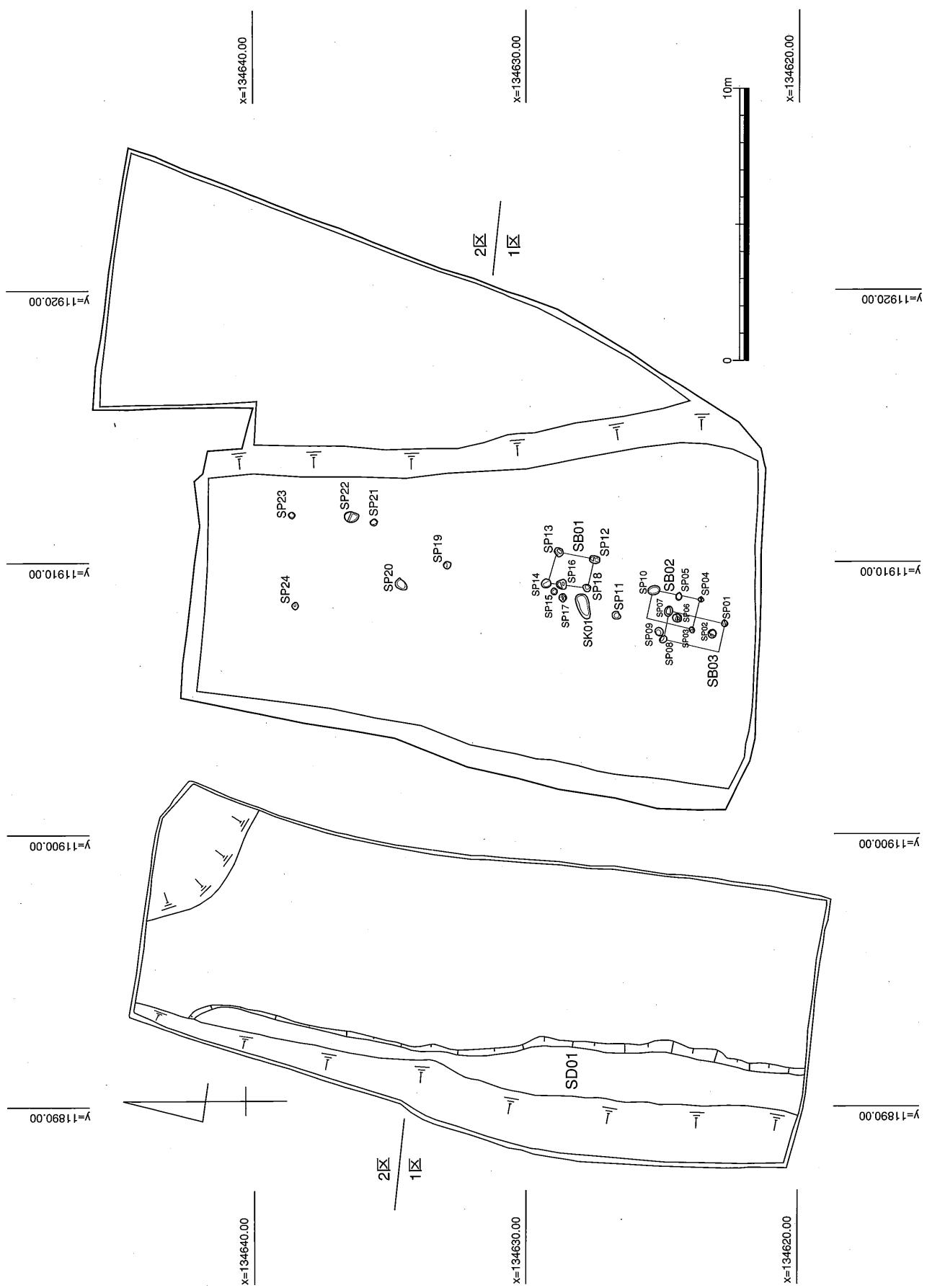
第6図 1区南壁土層図 (1/80)





第7図 2区北壁土層図 (1/80)

第8図 遺構平面図 (1/200)



第3章 調査の成果

第1節 調査区の概要と土層序

調査区は丘陵の斜面に位置しており、全体に東から西に向かって下っている。遺跡の北側から南側に向かう大きな谷地形の東側の斜面に相当している。調査前の表土面では東端部で標高20.50m、西端部で標高14.42m、比高差は6.28mに及ぶ。また花崗岩風化土からなる地山面では、東端部で標高20.34m、西端部で標高12.40m、比高差は7.94mに及ぶ。最も西側の調査区の南側部分は東側からの斜面がそのまま続いているが、北側部分では標高13.0m付近でほぼ平坦になっている。

この東側から西側に向かって下る斜面を削って畑やビニルハウス用地などの平坦地を造成しているため、旧地形が改変されている部分がかなりある。特に調査区の東側半分では表土直下に花崗岩風化土の地山が検出され、削平されている状況が窺える。そして調査区中央の南側の1区の部分で削平を免れた遺構を検出している。

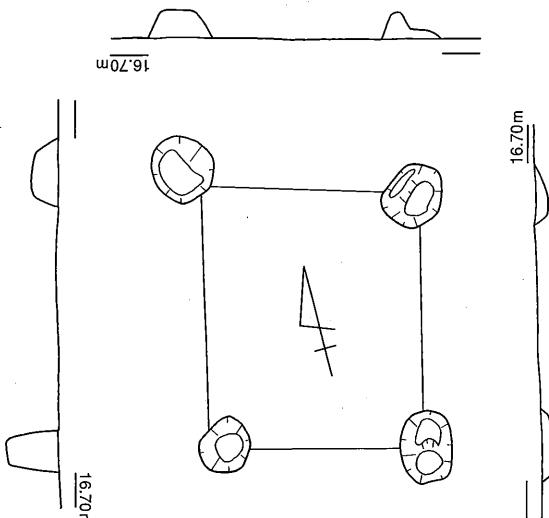
調査区中央から西側は谷地形の下部になるため、褐色系の砂質土や暗茶色系の砂混じり粘質土などが地山上に堆積している。最も西側の部分で表土から地山までの深さは2.02mになる。またこの西側の部分は谷地形の底に近いためか褐色系の粗砂が堆積しており、豪雨などの際に丘陵の上部から多量の水が谷筋を流れてきたためと思われる。この粗砂層から微量であるが縄文土器片とサヌカイト製石器が出土している。そして調査区の西端部の現耕作土と床土の下部の標高14.0m前後の地点で、これらの堆積土を掘り込んだ中世の溝状遺構を検出している。

第2節 遺構と遺物

掘立柱建物跡

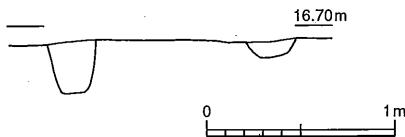
SB01（第9図）

1区の中央部分で検出した梁間1間×桁行1間の掘立柱建物跡である。梁間は1間で1.15m、桁行は1間で1.37m、建物面積は $1.58\text{m}^2 \approx 0.48\text{坪}$ である。建物の主軸方位はN-14°-Eである。柱穴の平面形は円形に近く、深さは0.11~0.28mである。埋土は暗褐色砂混じり粘質土の単一層である。柱穴から遺物は出土しておらず詳細な時期は不明であるが、SB01周辺の包含層から中世の遺物が出土している。



SB02（第10図）

1区の中央部分で検出した梁間1間×桁行2間の掘立柱建物跡で、SB01の南側2.2mに位置している。東側の桁行列に対応する西側の柱穴が2基未検出のため、積



第9図 SB01平・断面図 (1/40)

極的に掘立柱建物跡とするには根拠が薄いが、検出した他の柱穴の残存状況も悪く削平の可能性を考えて掘立柱建物跡として復元したものである。梁間は1間で1.08m、桁行は2間で1.74m、建物面積は $1.88\text{m}^2 \approx 0.57$ 坪である。建物の主軸方位はN-13°-Eである。柱穴の平面形はほぼ円形で、深さは0.08~0.28mである。埋土は暗褐色砂混じり粘質土の単一層である。SB01と同様に柱穴から遺物は出土していない。

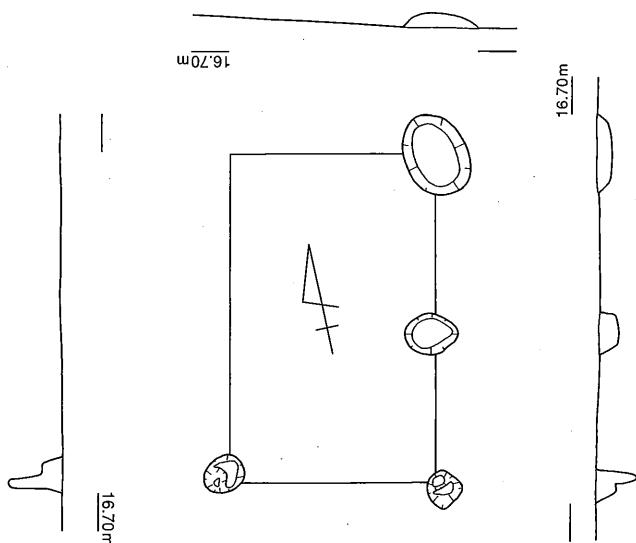
SB03（第11図）

1区の中央部分でSB02と重なって検出した梁間1間×桁行1間の掘立柱建物跡である。梁間は1間で1.08m、桁行は1間で2.04m、建物面積は $2.20\text{m}^2 \approx 0.67$ 坪である。南西隅の柱穴は傾斜の変換点に位置しており削平されたためか未検出である。建物の主軸方位はN-13°-EでSB02と同じ方位となっている。柱穴の平面形は円形で、深さは0.13~0.35mである。埋土は暗褐色砂混じり粘質土の単一層である。SB01・02と同様に柱穴から遺物は出土していない。

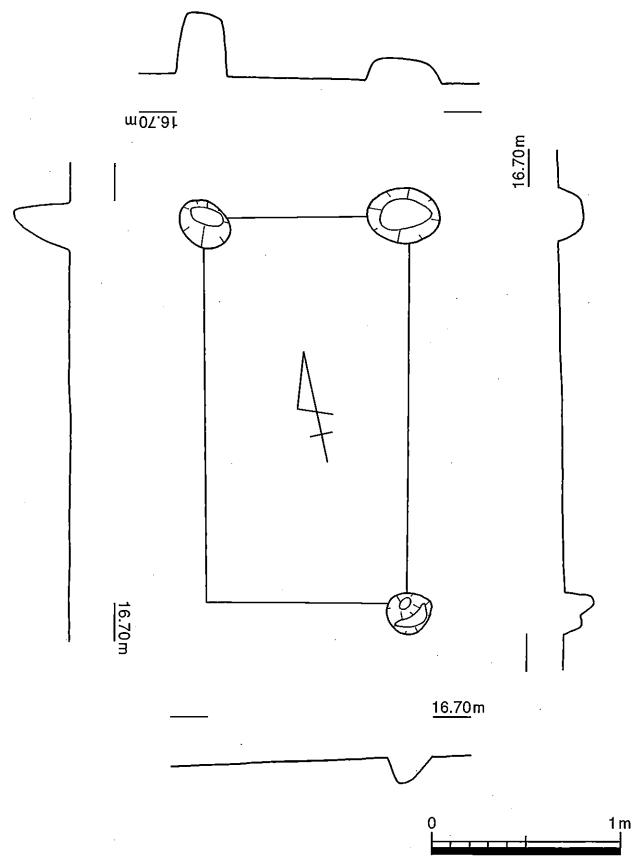
土坑

SK01（第12図）

1区の中央部分でSB01の西側で検出した土坑である。平面形は橢円形に近いが東側は西側に比べて直線的である。東西方向0.94m、南北方向0.45m、深さ0.21mである。掘り込みは全体的に緩やかであるが、北東部分がやや急である。埋土は暗褐色砂質土の単一層で、遺物は出土していない。



第10図 SB02平・断面図 (1/40)

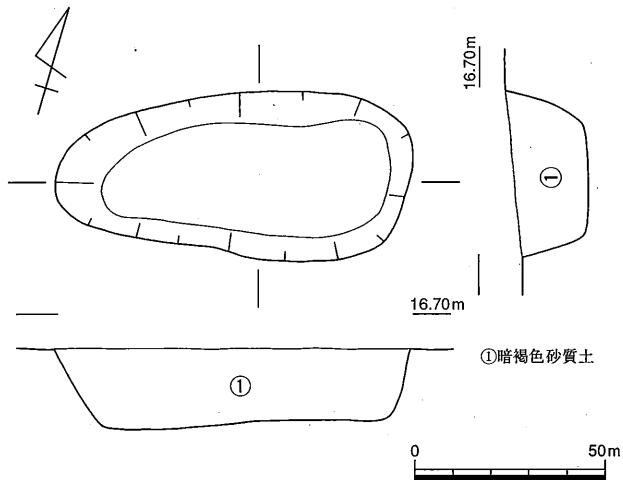


第11図 SB03平・断面図 (1/40)

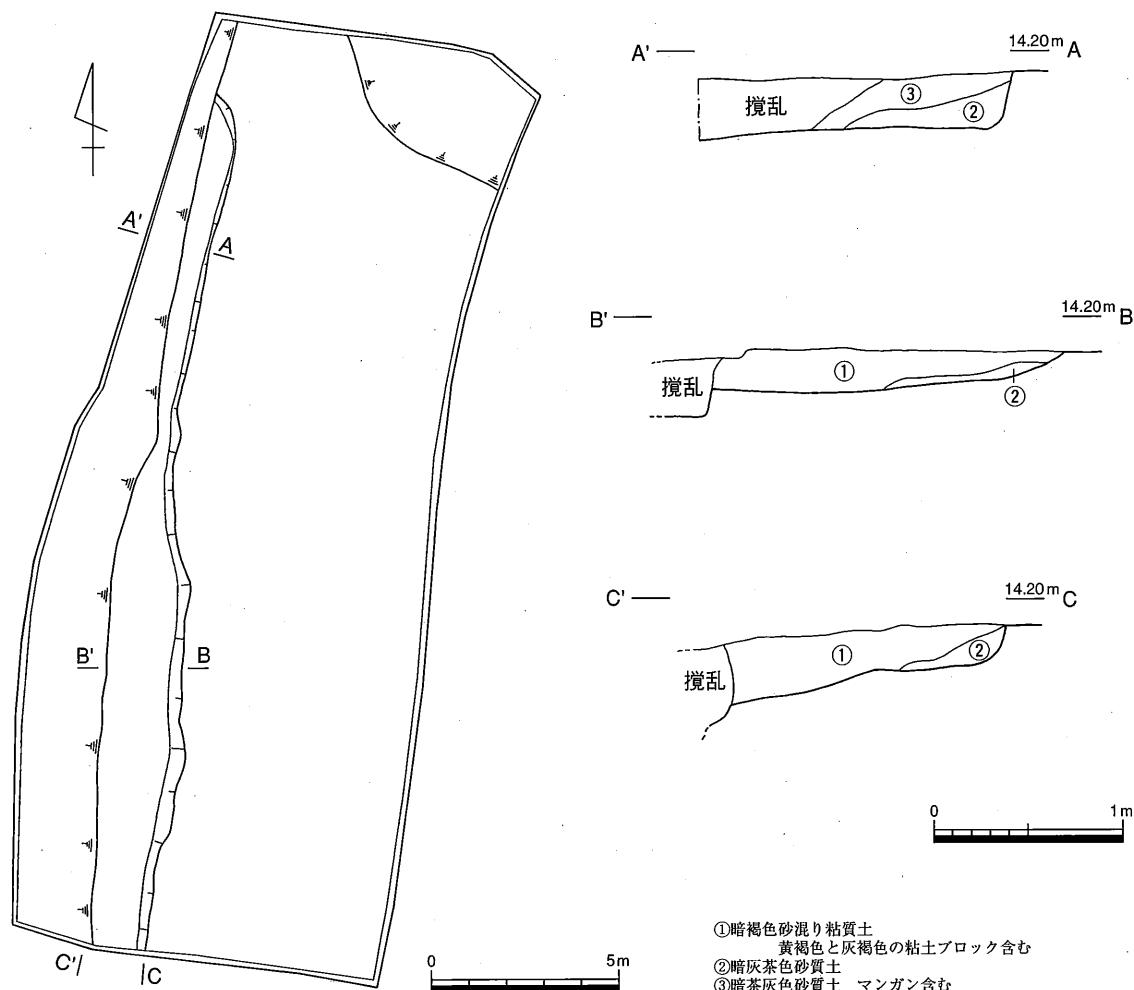
溝状遺構

SD01 (第13・14図)

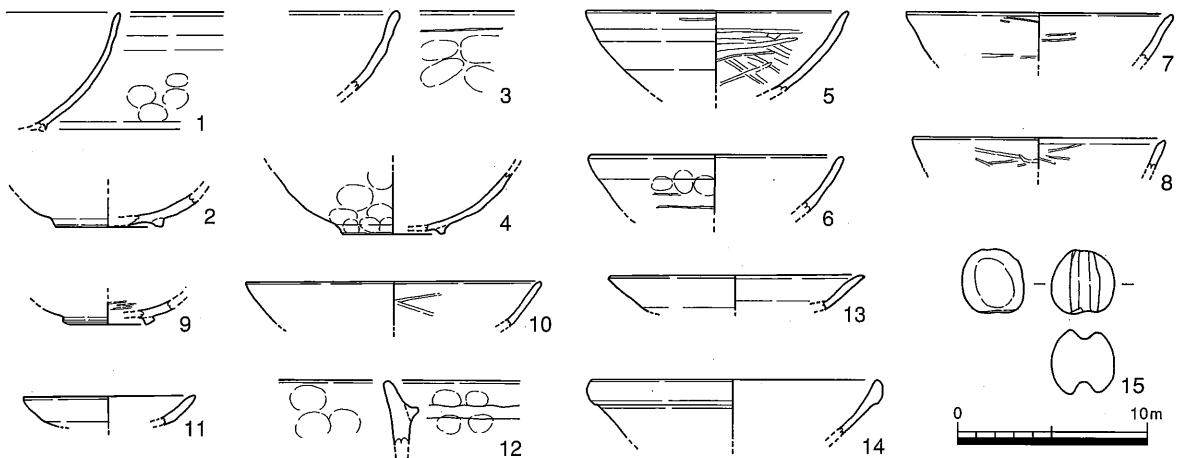
1区から2区にかけての調査区西壁沿いで検出した溝状遺構である。調査区西壁に沿って進み、2区の北西部分で北西方向に屈曲して調査区外に至る。遺構の中央から西側半分は全体に現代の搅乱により壊されているため、SD01の西側は不明である。あるいは調査区外に残存しているかもしれない。検出部分で全長22.8m、残存部の最大幅は2.4m、残存部の深さは0.34mである。掘り込みは北側に比べて南側のほうが



第12図 SK01平・断面図 (1/20)



第13図 SD01平面図 (1/200)、断面図 (1/40)



第14図 SD01出土遺物 (1/4)

緩やかである。埋土は黄褐色と灰褐色の粘土ブロックを含んだ暗褐色砂混じり粘質土が主体となっている。

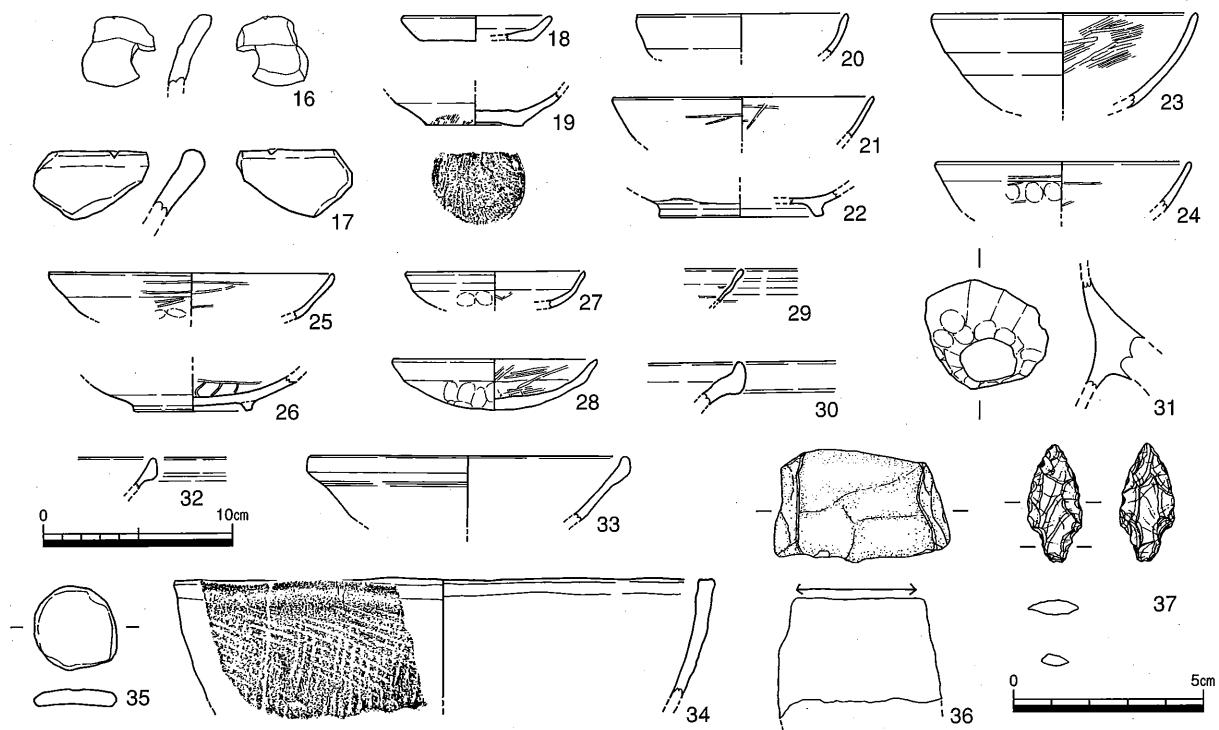
1～3は土師器碗である。1・3とも口縁部を強くナデしており、体部外面には指押さえを施している。3は外面に強くナデたときの爪の痕跡が沈線状に巡っている。2は吉備系のものと思われる。4は黒色土器B類の碗であるが、内面は磨滅している。5・6は須恵器の碗で十瓶山窯産である。5の体部外面には横方向のヘラミガキが僅かに残っている。内面は板ナデとともにヘラミガキを施している。6も体部外面にヘラミガキが認められる。7～11は瓦器で、7～10は碗、11は小皿である。7は口縁部端部内面に細いヘラミガキが凹線状に巡っている。楠葉型の可能性が高い。8は口縁部端部内面を強くナデしている。和泉型である。9の高台は外向きに踏ん張っている。内面に僅かにヘラミガキが認められる。瓦器と考えたが磨滅している部分が多く、あるいは十瓶山窯須恵器の碗の可能性もある。10の外面は磨滅しているが、内面にはヘラミガキを施している。和泉型か。11は口縁部を全体にナデしている。和泉型である。12は土師質の土釜で口縁部は内傾している。13は青磁の皿、14は白磁の碗で口縁部は玉縁になっている。15は土錘である。全体に球形で幅広の溝を巡らせている。

なお、埋土の最上部から近世の遺物が少量出土しているが、その出土状況から混入と考えられる。

包含層出土遺物（第15・16図）

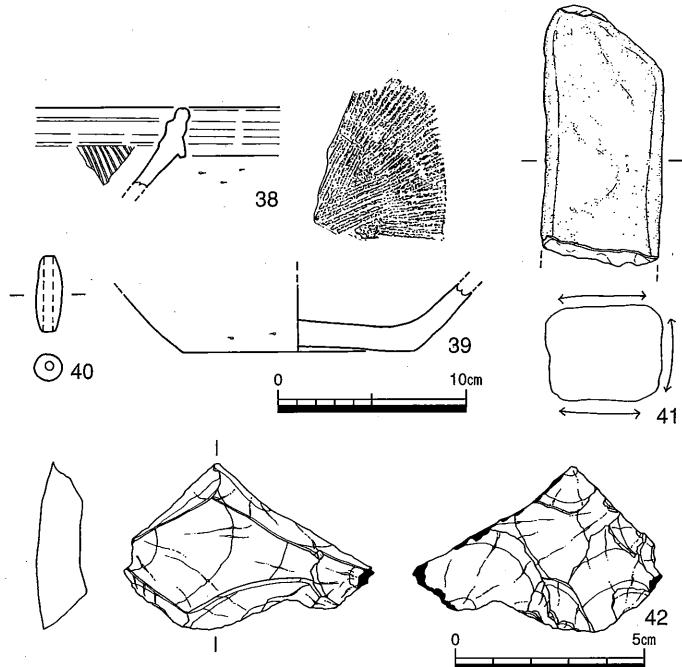
16～37は1区から出土した遺物である。このうち19が1区中央部分の掘立柱建物跡や小穴などの遺構が検出された部分での出土である。その他はすべて1区の最も西側の部分で出土している。

16・17は縄文土器の深鉢の口縁部と考えられるもので、胎土には砂粒が多く含まれている。16は大部分が磨滅しているが、口縁部端部上面に刻み目と思われる窪みが認められる。17は口縁部内面が肥厚している。18は土師器の小皿で、底部外面はヘラ切りの痕跡がある。19・20は土師器の杯である。19の底部は糸切りである。また底部から体部に立ち上がる部分の外面には、糸切りの際に付いた糸の痕跡が認められ、この痕跡はハケ目状になっている。21～23は黒色土器の碗で、いずれも両面黒色のB類である。21は体部の両面にヘラミガキを施している。23は体部外面は磨滅しているが、内面にはハケ目の後にヘラミガキを施している。24～29は瓦器で、25・26・29が碗、27・28が小皿である。



第15図 1区包含層出土遺物 (1/2、1/4)

24・25は体部両面にヘラミガキを施し、外面の下半には指押さえを施している。和泉型である。26は内面の見込み部分を中心らせん状と直線のヘラミガキを施している。ヘラミガキの形状から楠葉型の可能性が高い。27・28ともに口縁部を強くナデしており、体部外面には指押さえを施している。两者とも和泉型である。28は内面にヘラミガキが顕著で、見込み部分には格子状にヘラミガキを施している。底部は不安定である。椀の退化形態にも似るが、内面にヘラミガキをまだ丁寧に施している段階なので椀ではなく小皿と判断した。29の器壁は薄く、両面に細いヘラミガキを施している。和泉型か。30は東播系須恵器の擂鉢で、口縁部端部を上方に拡張している。31は土師質の足釜の脚部の付け根部分の破片である。32・33は白磁の碗で、両者とも口縁部は玉縁になっている。34は瓦質の鉢である。口縁部を強くナデしており、上面は平坦な面を作り出している。体部外面にはタタキの後に粗いハケ目を施している。35は円盤状土製品で、角を細かく削り落として丸く仕上げている。縄文土器片を転用している。36は砂岩製の砥石で、現存部では1面を使用している。



第16図 2区包含層出土遺物 (1/2、1/4)

る。37はサスカイト製の凸基有茎式の石鏃である。

38～42は2区から出土した遺物である。このうち38～40は2区の中央部分で、41・42は2区の西側部分で出土している。

38は堺・明石産陶器の擂鉢である。口縁部を強くナデしており、内面は卸し目を施した後に口縁部をナデしている。さらにナデにより突起状の段が形成されている。体部外面はヘラケズリである。39は備前焼の擂鉢で、体部の下部にはヘラケズリを施している。内面は体部と見込み部に分割して卸し目を施している。40は土錘である。41は砂岩製の砥石で、被熱して赤変している。3面を使用している。42はサスカイト製の石核で、表裏から交互に横長剥片を剥離している。

第4章 まとめ

第1節 遺構について

家の浦遺跡では全体に遺構・遺物とも希薄である。遺跡が所在する場所は、本来は斜面地であった部分を後世に平坦にして畠やビニルハウス用地としているため、遺構面が削平されている部分が多いことも一つの要因であると考えられる。検出した遺構は掘立柱建物跡3棟、溝状遺構1条、土坑1基、小穴（掘立柱建物跡を構成する柱穴を除く）13基である。溝状遺構以外は遺物を伴っていないが、包含層から出土した遺物から概ね中世前半から中頃にかけての遺構と考えられる。

掘立柱建物跡は調査区内の中央部分に建てられている。この部分は調査区が全体に傾斜する中で、狭いながらも平坦に近くなっている場所である。あるいは建物を建てるために整地したのかもしれない。なお掘立柱建物跡を検出した場所のすぐ東側に広い平坦面があるが、これは後世の削平によって平坦になった部分で本来は傾斜する地山部分である。掘立柱建物跡は1間×1間と1間×2間であるが規模的にはほぼ同じである。また建物の主軸方位も同じであるが、これは狭小な平坦地という場所的な制約によるためかもしれない。居住するには不適な場所であり建物の規模も小さいことから、検出した掘立柱建物跡は納屋あるいは作業小屋と考えたい。居住区は調査区の南側に広がっている山裾の平地部分と考えられる。そして遺跡の立地する丘陵一帯で何か生活活動の一端を担っていたのではなかろうか。

これに対して調査区の最も西側の部分では溝状遺構がある。この部分は調査区の中で最も低い部分で、また周辺を見ても大きな谷地形の底に近い場所である。この谷筋には上部から雨水が集まって流れることは十分に考えられる。またこの谷筋には現在でも小さな溜池が数箇所あり、地下には伏流水があることを物語っている。このような谷筋からの水の流れを制御するために、この部分に溝状遺構を掘削したと考えられる。

第2節 遺物について

出土遺物はコンテナにして2箱と少ない。その大部分は中世の遺物で、この他に微量の縄文時代・弥生時代の遺物と近世の遺物が出土している。このような状況の中で図化可能な細片まで抽出した結果、42点の遺物を図示することが出来た。この中で瓦器が11点（特定できるもので和泉型6点、楠葉型2点）、中国製の白磁が3点、青磁が1点、吉備系土師質土器碗が1点、東播系須恵器の擂鉢が1点、備前焼擂鉢（近世）が1点、堺・明石産陶器の擂鉢（近世）が1点と、在地以外の遺物の割合が高いのが注目される。全体の遺物出土量が少なく細片が多いことから統計的数値に問題を含むところであるが、

瓦器の出土比率が26%と高くなっているのが特徴と言える。包含層出土遺物が多いが、全体として中世前半の12世紀後半から13世紀前半を中心とした時期である。

第3節 遺物の流通について

第2章で指摘したように家の浦遺跡では他地域産の遺物の割合、中でも畿内産瓦器の出土量が多い。このように香川県内の中世の遺跡で、畿内産瓦器の出土比率が高いものに高松城跡西の丸町地区（報告書Ⅱ C区SX1100：53%…供膳具比⁽¹⁾、報告書Ⅲ 下層遺構：37.4%⁽²⁾）高松市松並・中所遺跡Ⅲ区B・C SD01（19%）⁽³⁾、さぬき市大山遺跡包含層（14.8%）⁽⁴⁾、さぬき市中谷遺跡（16%…報告遺物比）⁽⁵⁾がある。

このように他地域の遺物が讃岐に搬入される手段として、瀬戸内海を利用した水運が代表的なものであった。瀬戸内海は弥生時代以降、中国大陸や朝鮮半島との物流を支えた海上交通の要衝となっていた。特に中世には商業の発達に伴い物資の輸送が活発になり、西日本では畿内と西国を結ぶ輸送路として瀬戸内海航路が重要視された。

家の浦遺跡は海岸から400mの距離に位置している。周囲の地理的環境をみても、中世段階で家の浦遺跡に他地域産の遺物が搬入された手段として水運を考えることは想像に難くない。この家の浦遺跡から海岸沿いに約2km南に下った莊内半島の付け根部分に現在の仁尾港がある。現在の仁尾港は仁尾・賀茂神社文書に残る延文三年（1358）九月日付けの文書に「奉寄進 詫間御庄仁尾浦 鴨大明神免田事」と記載されており、14世紀中頃にはすでに港の存在が認められる。また寄進状という文書に記載されていることからもある程度発展した段階の港と考えられる。また重要文化財に指定されている応永八年（1401）に建立された禅宗の仏殿である円通殿を有する常德寺の文書の中でも、永享元年（1429）十一月廿七日付けで「詫間庄仁尾浦常德寺寄進状之事」のように仁尾浦の記載が認められる。

このように仁尾の港である仁尾浦が発展した背景には先に見た仁尾・賀茂神社を中心とした神人による海上交易がある。仁尾・賀茂神社は京都市（上・下）賀茂神社の分霊を平安時代後期に大津多島（大薦島）に奉納したのが始まりとされており、室町時代に現在の場所に移されたものと考えられている。寛治四年（1090）には京都市（上・下）賀茂神社に不輸田六百余町が寄進され、諸国に御厨を設置した。その御厨の一つに讃岐国内海があり、時代は下るが觀応元年（1350）十二月十七日の讃岐国守護の細川顯氏による禁制に「禁制 鴨御祖社領讃岐国内海津多島供祭所」とあり、鴨御祖社=下賀茂神社の讃岐国内海の御厨が薦島を含んだ周辺海域であることがわかる。この御厨で魚介類を採取する集団は供祭人として、本来は神社の下級神職である神人の系列に加えられ、魚介類の交易により神社に奉仕する集団になっていった。これら神人の交易、商業活動の本拠地として仁尾浦は発展していった。また中部瀬戸内海航路を把握するという軍事的要衝でもあったことは、讃岐国守護の細川満元が応永二十七年（1420）ごろに仁尾浦を守護の直轄地である御料所としたことからもわかる。

さらに莊内半島は中世段階で九条家領詫間荘、石清水社領草木荘、摂関家領三崎荘などの畿内地方に本拠地をもつ荘園があり、荘園から畿内への貢納物の輸送に大量に安価で運べる手段として海運はますます発展していったのである。

中世以降、商品経済の発達とともに輸送手段としてこれまで以上に瀬戸内海航路は整備され、物資を積み込む港が各地で発展していった。この物資の流通を示す資料として「兵庫北関入船納帳」⁽⁶⁾がある。この資料は東大寺が設置した摂津国の兵庫北關に文安二年（1445）正月から同三年正月までに入管した

船舶に対する関銭賦課の記録である。これには入管した船籍地、積載品目、積載量、関銭、関銭の納入日、船頭、問丸が記載されている。讃岐と考えられる船籍地は宇多津、観音寺、三本松、引田、塩飽、野原など17ヶ所と考えられている。この中で丹穂船籍のものが4月に1回、12月に2回入管している。丹穂は安芸（広島市仁保）とも言われているが、四月九日の入管記録の積載品目に讃岐の特産である赤米が記載されていることから、讃岐の仁尾であると考えられている。このように具体的な交易記録からも仁尾浦が重要な港の一つであることがわかる。

仁尾浦の周辺部から拠点的な港である仁尾浦に物資が集積され、そこから畿内に向けて物資を輸送したと考えられ、逆に畿内からの帰り便の荷も仁尾浦に降ろされ、そこから周辺部に再分配されたと考えられよう。畿内産の瓦器が量的に出土する背景には、神人の交易品や荘園からの貢納品を近畿地方に運送した帰りに、畿内からの荷の一つとして土器が搬入されたと考えられている⁽⁷⁾。家の浦遺跡での瓦器出土率の高さもこのような要因によるものと考えられる。家の浦遺跡の場合は、現在の家の浦港周辺の海浜部の発掘調査例がないことや、文献でもそのような記載が残っていないことから、上記のようにおそらく拠点的な港である仁尾浦に荷揚げされ集積されたのちに家の浦遺跡に瓦器が搬入されたものと思われる。あるいは「港湾都市」仁尾の市で商品として売買された結果として家の浦遺跡にもたらされたかも知れない。仁尾浦と家の浦遺跡との間は急峻な山が海岸近くまで迫っており、陸路はかなり条件の悪い道であったため、仁尾浦から家の浦の海浜部間もまた海運に依った可能性が高い。

以上のように遺跡の立地と周辺地域の状況、さらに少量ながらも出土遺物の分析から家の浦遺跡の中世段階の様相を考察してきた。ここまで述べてきたような仁尾浦の状況は家の浦遺跡の中心年代より下る中世後半段階のものである。しかし仁尾・賀茂神社の神人の活動や荘内半島の荘園の存在などから、中世前半にも仁尾浦を拠点とする中世後半のような状況は十分に伺えることが出来る。

（註）

- (1) 佐藤竜馬『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四冊 高松城跡（西の丸地区）Ⅱ』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター 2003 p237
- (2) 松本和彦「大山遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四十八冊 大山遺跡・中谷遺跡・楠谷遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター 2004 p69第4表から引用
- (3) 松本和彦「大山遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四十八冊 大山遺跡・中谷遺跡・楠谷遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター 2004 p69第4表から引用
- (4) 松本和彦「大山遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四十八冊 大山遺跡・中谷遺跡・楠谷遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター 2004 p69第3・4表から引用
- (5) 松本和彦「中谷遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四十八冊 大山遺跡・中谷遺跡・楠谷遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター 2004
- (6) 燐心文庫・林屋辰三郎編『兵庫北関入船納帳』中央公論美術出版 1981
- (7) 脇田晴子「中世土器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ 1986

〈参考文献〉

- 『香川県史 第二巻 中世』 香川県 1989
『新修 仁尾町誌』 香川県仁尾町 1984
『香川県の地名』 平凡社 1989
『国史大辞典』 吉川弘文館 第3巻1983 第7巻1986
網野善彦「海民の諸身分とその様相」『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店 1984
網野善彦『日本中世都市の世界』筑摩書房 1996

市村高男「中世後期の津・湊と地域社会」『津・泊・宿－中世都市研究3』新人物往来社 1996

柴垣勇夫編『中世瀬戸内の流通と交流』塙書房 2005

橋詰茂 編「内海順風」『中世の讃岐』 美巧社 2005

松本和彦「大山遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四十八冊 大山遺跡・中谷遺跡・楠谷遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 2004

矢田俊文「中世水運と物資流通システム」『日本史研究』448 1999

遺物観察表・土器

遺物番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調・外面	色調・内面	調整・外面	胎土	報告書體名	備考
1	土・碗	—	—	—	—	細片	7.5YR 7/6 橙	10YR 8/3 淡黃澄	マメツ	SD01	
2	土・碗	—	—	—	5.4	1/8	5Y 8/2 灰白	5Y 8/2 灰白	ナデ	SD01	吉備系
3	土・碗	—	—	—	—	細片	10YR 7/3 にぶい黄澄	10YR 7/3 にぶい黄澄	ヨコナデ、指押さえ後指ナデ	SD01	
4	黒色・碗	—	—	—	5.3	1/8	10YR 6/3 にぶい黄澄	10YR 7/2 にぶい黄澄	ヨコナデ、指押さえ、ナデ	SD01	黒色B類
5	須・碗	14.0	—	—	—	1/8	2.5Y 5/2 暗灰黃	2.5GY 4/1 黄灰	ナデ、ヘラミガキ	SD01	十海山產
6	須・碗	13.4	—	—	—	1/8	2.5Y 8/1 灰白	2.5Y 8/1 灰白	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ	SD01	十海山產
7	瓦器・碗	14.0	—	—	—	1/8	N 4/ 灰	N 4/ 灰	ヨコナデ、ヘラミガキ	SD01	楠葉型
8	瓦器・碗	13.4	—	—	—	1/8	N 5/ 灰	N 5/ 灰	ヨコナデ、ヘラミガキ	SD01	和泉型
9	瓦器・碗	—	—	4.0	—	1/8	2.5Y 6/1 黃灰	2.5Y 5/1 黄灰	ナデ、マメツ	ヘラミガキ	SD01
10	瓦器・碗	15.6	—	—	—	1/8	5Y 6/2 灰オリーブ	2.5Y 6/2 灰黃	ナデ後ヘラミガキ	SD01	和泉型?
11	瓦器・小皿	9.2	—	—	—	1/8	N 4/ 灰	N 4/ 灰	ナデ	SD01	和泉型?
12	土・土釜	—	—	—	—	細片	5YR 6/6 檻	5YR 6/6 檻	ヨコナデ、指押さえ、ナデ	指押さえ、ナデ	SD01
13	青磁・皿	13.4	—	—	—	1/8	7.5GY 7/1 明綠灰	7.5GY 7/1 明綠灰	回転ナデ	回転ナデ	SD01
14	白磁・碗	15.0	—	—	—	2/8	5GY 8/1 灰白	2.5GY 8/1 灰白	回転ナデ	回転ナデ	SD01
15	土錘	3.3	3.2	—	—	完存	5YR 6/6 檻	5YR 6/6 檻	指ナデ	—	SD01
16	縄 深鉢	—	—	—	—	細片	10YR 7/4 にぶい黄澄	10YR 4/1 褐灰	ナデ	マメツ	細・多
17	縄 深鉢	—	—	—	—	細片	10YR 7/3 にぶい黄澄	7.5YR 7/6 檻	ナデ、マメツ	ナデ、マメツ	細・多
18	土・小皿	7.6	1.3	5.9	1/8	7.5YR 7/3 にぶい澄	10YR 6/3 にぶい黄澄	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	細・少
19	土・杯	—	—	5.0	3/8	7.5YR 8/4 淡黃澄	10YR 8/3 淡黃澄	回転ナデ、糸切り	回転ナデ、糸切り	回転ナデ、糸切り	糸切り
20	土・杯	11.2	—	—	1/8	10YR 8/3 浅黃澄	2.5Y 8/2 灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	細・少
21	黒色・碗	13.8	—	—	10.6	1/8	7.5YR 3/2 黒褐	N 3/ 暗灰	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	黒色B類
22	黒色・碗	—	—	—	—	—	10YR 5/3 にぶい黄褐	5Y 4/1 灰	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色B類
23	黒色・碗	14.0	—	—	—	1/8	10YR 5/3 にぶい黄褐	10YR 3/1 黑褐	ヨコナデ	ハケ目後ヘラミガキ、ナデ	細・少
24	瓦器・碗	13.4	—	—	—	1/8	N 4/ 灰	N 4/ 灰	ナデ後ヘラミガキ、指押さえ	ナデ後ヘラミガキ、指押さえ	和泉型
25	瓦器・碗	15.0	—	—	—	1/8	N 4/ 灰	N 4/ 灰	ナデ後ヘラミガキ、指押さえ	ナデ後ヘラミガキ、指押さえ	和泉型
26	瓦器・碗	—	—	6.4	3/8	7.5Y 5/1 灰	7.5Y 3/1 オリーブ黒	ナデ、マメツ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	楠葉型
27	瓦器・小皿	9.4	—	—	—	1/8	N 4/ 灰	N 4/ 灰	ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	和泉型
28	瓦器・小皿	10.8	2.7	4.6	2/8	細片	7.5YR 6/6 檻	7.5YR 6/6 檻	ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ	和泉型
29	瓦器・碗	—	—	—	—	細片	5GY 8/1 灰白	5GY 7/1 明オリーブ灰	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	和泉型
30	須・鉢	—	—	—	—	細片	10GB 6/1 青灰	10GB 6/1 青灰	回転ナデ	回転ナデ	東播系
31	土・土釜	—	—	—	—	細片	7.5YR 6/6 檻	7.5YR 6/6 檻	ナデ	ナデ	細・少
32	白磁・碗	—	—	—	—	細片	5GY 8/1 灰白	5GY 8/1 灰白	回転ナデ	回転ナデ	
33	白磁・碗	17.0	—	—	—	1/8	5GY 8/1 灰白	5GY 8/1 灰白	回転ナデ	回転ナデ	
34	瓦質・鉢	28.8	—	—	—	1/8	10YR 2/2 黒褐	2.5Y 2/1 黒褐	ナデ、タキキ後/ハケ目	ナデ、タキキ後/ハケ目	
35	円盤状土製品	幅 4.4	厚 0.8	—	—	完存	10YR 7/3 にぶい黄澄	10YR 7/3 にぶい黄澄	マメツ	マメツ	細・普

遺物観察表・石器

遺物番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調・外面	調整・内面	胎土	報告書遺構名	備考
38	陶・壺体	—	—	—	細片	5YR 3/3 暗赤褐色	5YR 3/2 暗赤褐色	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、鉢目	中・少 明石
39	陶・壺体	—	—	12.2	1.8	10R 6/4 にぶい赤橙	10R 5/4 赤褐	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、鉢目	細・少 備前
40	土錘	長 4.0	幅 1.4	厚 1.4	完存	N 3/ 暗灰	N 3/ 暗灰	ナデ	—	細・少

遺物番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調・外面	調整・外	胎土	報告書遺構名	備考
36	砥石	3.05	4.70	3.20	60.05	砂岩	1区包含層	1面使用		
37	石鎌	3.10	1.40	0.40	1.56	サヌカイト	1区包含層		凸基有茎式	
41	砥石	6.95	3.25	2.65	87.74	砂岩	2区包含層		3面使用、被熱赤変	
42	石核	6.60	4.40	1.45	34.04	サヌカイト	2区包含層			

県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

川島本町山田遺跡

2007. 3

香川県教育委員会

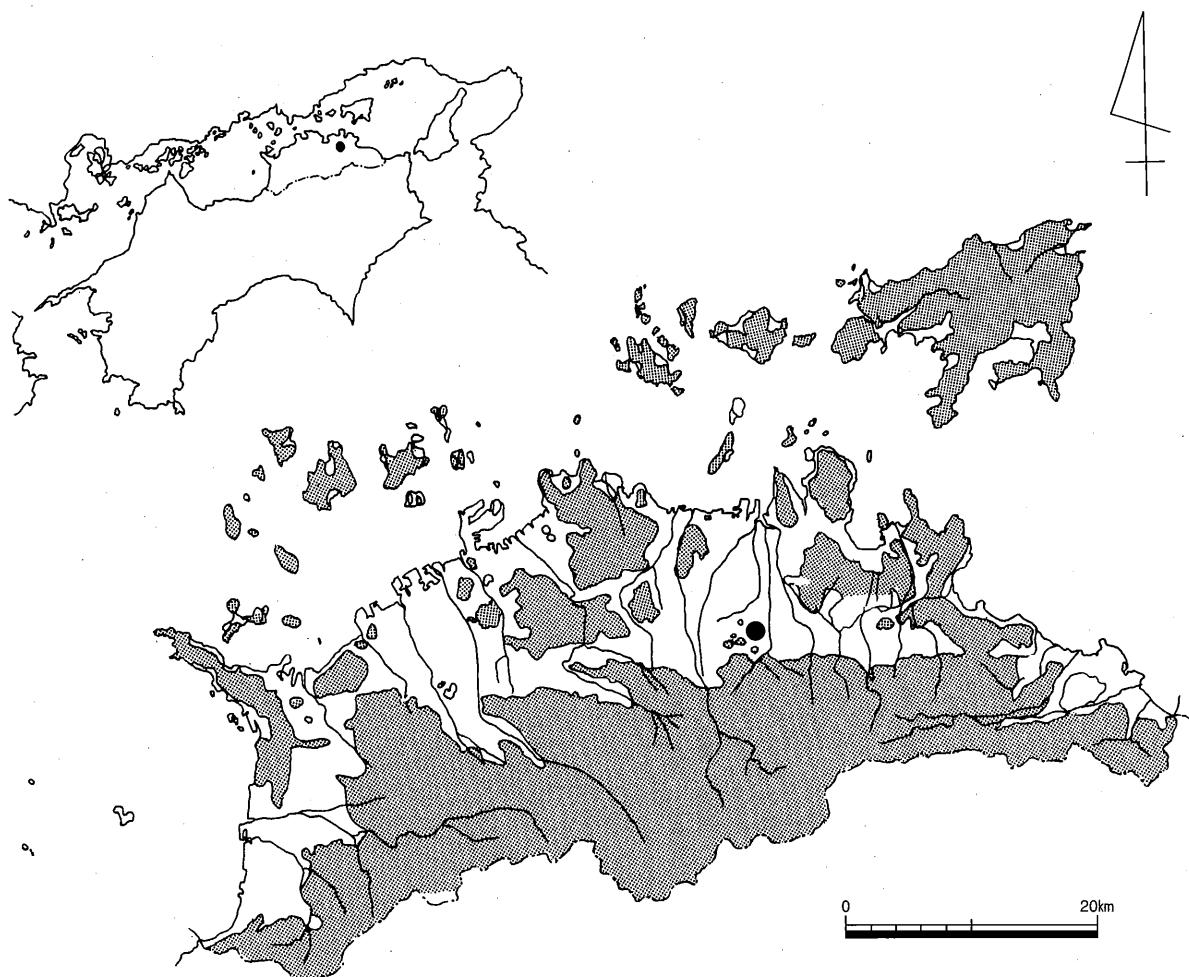
第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

県道西植田高松線と県道三木国分寺線が交わる高松市川島本町の交差点を中心とした一帯は、近年の交通量の増加とともに渋滞が慢性的に発生している。この渋滞を緩和する目的で香川県土木部道路建設課（現道路課）は川島本町交差点の西側で県道三木国分寺線から南側に向かって県道西植田高松線のバイパス路線を計画した。

この計画をうけて香川県教育委員会事務局文化行政課は、バイパス路線予定地内の埋蔵文化財の有無を確認するために、平成16年1月と平成17年1月に試掘調査を実施した。その結果、路線内の3箇所について遺構・遺物が検出され、南側から川島本町南遺跡、川島本町遺跡、川島本町山田遺跡として周知されることとなった。試掘調査の結果を受けて、文化行政課と道路建設課及び香川県高松土木事務所との間で埋蔵文化財の保護措置について協議したところ、事前に発掘調査を実施することで合意した。

平成17年度に川島本町遺跡と川島本町南遺跡の発掘調査を実施し、縄文時代後期から中・近世に至る遺構・遺物が検出された。川島本町遺跡で縄文時代後期の土器が多く出土したことや、川島本町南遺跡ではメノウ製の勾玉が出土するなど注目される成果となった。



第17図 遺跡位置図 (1/600,000)



第18図 川島本町山田遺跡周辺図 (1/5,000)

今回報告する川島本町山田遺跡の道路を挟んで南側の部分には、建物があったため試掘調査が実施されていなかったので、平成17年度の川島本町遺跡の発掘調査とあわせて試掘調査を実施した。その結果、近世以降の遺構・遺物が僅かに検出されたにとどまったため、当該地はこの試掘調査で保護措置は終了した。したがって川島本町山田遺跡は平成17年1月の試掘調査により周知された196m²について発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

発掘調査は香川県教育委員会を調査主体、香川県埋蔵文化財センターを担当者として、平成18年8月1日～31日に実施した。調査対象地は宅地であったため建物の基礎が残存しており、機械による表土等の掘削時にはコンクリート基礎を外部に搬出するなどやや手間取った。

調査期間中は夜間の豪雨のため調査区が水没することが2回あり、また折からの酷暑のため作業能率が落ちることもあったが、予定通りに8月31日には埋め戻しを含めて発掘調査は終了した。

第3節 整理作業の経過

現地での発掘調査終了後、平成18年9月1日から香川県埋蔵文化財センターで整理作業を実施し、発掘調査報告書を作成した。出土遺物の洗浄は現地で終了していたため、遺物の注記作業から開始した。遺物の接合・実測、遺構・遺物図面のトレース、レイアウト、遺物写真撮影、原稿執筆、編集を行い、9月30日にはすべての整理作業を終了した。また報告書刊行業務も平成18年度に実施した。

第4節 調査体制

発掘調査、整理作業、報告書刊行業務は香川県埋蔵文化財センターが以下の体制で実施した。

香川県埋蔵文化財センター

総括	所長 渡部明夫	調査課	課長 廣瀬常雄
	次長 榊原正人		文化財専門員 北山健一郎
総務課	課長 野口孝一		文化財専門員 森 格也
	主任 嶋田和司		嘱託（土木） 高嶋勝英
	主任 田中千晶		嘱託 中村大地（8月）
			嘱託 八木國裕（9月）

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

香川県の中央部に位置する高松平野は、主に新川・春日川・香東川・本津川の氾濫によって形成された沖積平野で、北側は瀬戸内海に面している。川島本町山田遺跡はこの高松平野の南東部にあり、春日川の西400mほどの場所に位置している。遺跡はこの春日川の氾濫による沖積地に形成され、遺跡付近には春日川の旧河道や春日川に注ぐ旧流路が認められる。

川島本町山田遺跡は先述のように高松平野の南東部にあるが、平野の縁辺部にあり南側には上佐山などの山塊や丘陵が迫っている。また南西側一帯は段丘になっており、遺跡との比高差は10m前後に及んでいる。そしてこの段丘を南西から北東に向かって貫く開析谷の出口部分の沖積地に立地しており、春日川の旧河道とも交差するような場所である。遺跡の基盤層はこの開析谷からの堆積と春日川の氾濫による堆積で形成されている。この基盤層は川島本町山田遺跡の南200mのところに位置する川島本町遺跡の調査成果では、縄文時代後期には堆積が終了していると考えられており、今回の調査成果もこれに矛盾しない。

第2節 歴史的環境

川島本町山田遺跡の位置する高松平野南東部から東部にかけての歴史は旧石器時代に遡る。しかし、前田東・中村遺跡でナイフ形石器と角錐状石器が、久米池南遺跡と雨山南遺跡でナイフ形石器が僅かに出土している程度で、遺跡数・遺物量ともまだ少ない。

縄文時代では後期になると川島本町遺跡で落ち込み状遺構が検出されており石器類が出土するとともに、包含層から後期の土器が比較的まとまって出土している。このほかに前田東・中村遺跡では旧河道から注口土器を含む土器が多く出土している。晩期では林・坊城遺跡で旧河道から土器とともに鋤・鍬などの農耕具が出土しており注目される。このほかに前田東・中村遺跡では土坑が検出されている。

縄文時代晩期段階すでに水稻耕作の萌芽が見受けられたが、弥生時代前期では北野遺跡で多量の土器とともに水田跡が検出されている。このほかに汲仏遺跡では二重の環濠が検出されており、空港跡地遺跡、宮西・一角遺跡、凹原遺跡、光専寺山遺跡でも遺構や遺物が検出されている。中期前半では高松平野の南東部には顕著な遺跡は見受けられないが、中葉では多肥松林遺跡や日暮・松林遺跡で集落が築かれる。後半になると久米池南遺跡や中山田遺跡などのように丘陵の斜面地にも集落が築かれている。後期になると空港跡地遺跡、凹原遺跡、日暮・松林遺跡などに集落が築かれている。

古墳時代の集落としては空港跡地遺跡があり前期・中期の竪穴住居跡が検出されている。また六条・上所遺跡では韓式系土器が出土しており、初期須恵器の窯跡が検出された三谷三郎池西岸窯跡とともに注目される。古墳に目を向けると、前期の前方後円墳としてともに竪穴式石室を主体部にもつ高松市茶臼山古墳、瘤山古墳（小日山1号墳）がある。中期前半段階には剖抜式石棺をもつ全長96mの前方後円墳である三谷石舟古墳がある。さらに削平されて周溝のみが残っている大型の円墳である高野丸山古墳がある。後期から終末期になると前田東町から前田西町にかけての丘陵の裾部を中心に平尾古墳群などの古墳が、また雨山・日山から石舟池の一帯にも矢野面古墳や雨山南古墳群、平石上古墳群、石舟池古墳群などが築かれている。

古代では川島本町山田遺跡の一帯は山田郡三谷郷に属していた。三谷郷では今のところ集落は検出さ



1. 川島本町山田遺跡
2. 川島本町遺跡
3. 川島本町南遺跡
4. 上天神遺跡
5. 太田下・須川遺跡
6. 蛙股遺跡
7. 居石遺跡
8. 井手東Ⅱ遺跡
9. 井手東Ⅰ遺跡
10. さこ・長池Ⅱ遺跡
11. さこ・長池Ⅰ遺跡
12. さこ・松の木遺跡
13. 林・坊城遺跡
14. 六条・上所遺跡
15. 東山崎・水田遺跡
16. 前田東・中村遺跡
17. キモンド一遺跡
18. 佐藤城跡
19. 松縄下所遺跡
20. 境目・下西原遺跡
21. 上西原遺跡
22. 大池遺跡
23. 林・さこ遺跡
24. 林下所遺跡
25. 久米山5号墳
26. 林下所・六条乾遺跡
27. 本山城跡
28. 諏訪神社古墳
29. 久米山6号墳
30. 久米山1号墳
31. 久米山2号墳
32. 久米山4号墳
33. 久米山5号墳
34. 川添淨水場遺跡
35. 久米池遺跡
36. 久米池南遺跡
37. 西茶臼山1号墳
38. 西茶臼山2号墳
39. 高松茶臼山古墳
40. 高松市茶臼山古墳
41. 高松茶臼山南古墳
42. 高松茶臼山東古墳
43. 北山西古墳
44. 山線古墳群
45. 久本古墳
46. 久本山東峰古墳
47. 北山古墳
48. 東谷池遺跡
49. おかやま古墳群跡
50. 濑木神社古墳
51. 瀧本神社東古墳
52. 宮廻八幡宮境内古墳
53. 岡崎古墳
54. 田楽古墳
55. 岡崎神社遺跡
56. 金石山1号墳
57. 金石山2号墳
58. 平尾2号墳
59. 平尾1号墳
60. 平尾小古墳群
61. 潮満塚古墳
62. 東畑1号墳
63. 東畑2号墳
64. 居石城跡
65. 太田城跡
66. 多肥下遺跡
67. 池仏遺跡
68. 回原遺跡
69. 日暮・松林遺跡
70. 多肥・松林遺跡(高校、土木)
71. 松林遺跡
72. 多肥・松林遺跡(県道)
73. 多肥・宮尻遺跡
74. 下池遺跡
75. 池ノ内Ⅱ遺跡
76. 宮尻上遺跡
77. 北原遺跡
78. 多肥廢寺
79. 高木城跡
80. 宮西・一角遺跡
81. 一角遺跡
82. 公務員宿舎遺跡
83. 中林城跡
84. 空港跡地遺跡(亀の町Ⅰ地区)
85. 空港跡地遺跡(亀の町Ⅱ地区)
86. 空港跡地遺跡
87. 六条西村遺跡
88. 六条上川西遺跡
89. 六条城跡
90. 前田城跡
91. 上林城跡
92. 前田城跡
93. 宝寿寺廃寺
94. 前田東城跡
95. 天満宮古墳
96. 由良山城跡
97. 由良城跡
98. 由良南原遺跡
99. 芳雄山古墳
100. 高尾遺跡
101. 高尾権現社古墳
102. 池戸城跡
103. 砂入遺跡
104. 大塚城跡
105. 南天枝遺跡
106. 尾端遺跡
107. 十川東・平田遺跡
108. 西尾遺跡
109. 田中砂古遺跡
110. 四十塚古墳
111. 出之山北塚
112. 出之山南古墳
113. 十河城跡
114. 鶯池南古墳
115. 西尾天神社古墳
116. 出羽城跡
117. 光専寺山遺跡
118. 池田城跡
119. 本村遺跡
120. 池田合子神社古墳
121. 毘沙門古墳群
122. 上佐山東麓古墳群
123. 中山田古墳群
124. 中山田遺跡
125. 上佐山城跡
126. 三谷通谷遺跡
127. 下代古墳
128. 高野丸山古墳
129. 高野廢寺
130. 高野南1号墳
131. 高野南2号墳
132. 鎌野城跡
133. 石船池古墳群
134. 三谷石船古墳
135. 三谷城跡
136. 三谷三郎池西岸窯跡
137. 三谷三郎池D遺跡
138. 日妻山古墳
139. 三谷三郎池A遺跡
140. 矢野面古墳
141. 犬の馬場古墳
142. 塚山古墳(小日山1号墳)
143. 塚山2号墳(小日山2号墳)
144. 145. 欠番
145. 平石上3号墳
146. 平石上2号墳
147. 平石上1号墳
148. 北野遺跡
149. 日山山頂古墳
150. 三谷中原遺跡
151. 鎌野西遺跡
152. 浅野万塚古墳
153. 北山古墳群
154. 雨山南古墳群
155. 浅野八王子古墳
156. 船岡古墳
157. 宗高坊城遺跡
158. 諏訪神社遺跡
159. 船岡古墳
160. 百相廃寺
161. 百相城跡
162. 宗高坊城遺跡
163. 諏訪神社遺跡

第19図 周辺遺跡位置図 (1/50,000)

れていないが、林郷では空港跡地遺跡が、宮所郷では前田東・中村遺跡で集落が検出されている。古代寺院としては三谷郷では川島本町山田遺跡の西側の段丘上に、奈良～平安時代の軒瓦が出土している高野廃寺があり、礎石と考えられる転用された切り石が2個残存している。林郷では奈良時代の軒瓦が出土している拝師廃寺が、宮所郷では白鳳時代の軒瓦と塔跡と考えられる礎石が残存している宝寿寺廃寺がある。また現在の県道三木国分寺線より1町ほど北側で東西方向に古代の官道である南海道が通っていたと考えられている。三谷中原遺跡ではこの南海道の側溝や道路部分の可能性が高いとされている箇所が検出されている。また延喜式に記載されている讃岐国の駅家の一つである「三谿（三谷）駅」が設置されていたとされるが詳細は不明である。

中世になると空港跡地遺跡、上林遺跡、由良南原遺跡などで集落が築かれる。戦国時代では当該地にも多くの城館が築造されている。川島本町山田遺跡の南方2kmの上佐山の頂部に築かれた三谷氏の居城である上佐山城跡は多くの曲輪とともに連続堅堀が認められ、高松平野を見渡せる堅固な要害となっている。春日川の東側の低丘陵部には十河氏の居城である十川城跡があり、主郭には現在称念寺が建っており一部に堀跡が残っている。この他に由良山の山頂には由良山城跡が、三谷中原遺跡の東側には鎌野城跡があったと伝えられているが遺構は確認出来ない。

川島本町山田遺跡の南側に隣接する東西方向の道は近世の南海道と考えられており、「讃岐国往還」、「中筋大道」とも呼ばれている。その道筋は高松平野では基本的に県道三木国分寺線の南側を通過しており、県道三木国分寺線建設以前の旧道であった。春日川を渡る部分では東から現在の川島橋を越えて川島本町の交差点で屈曲して100mほど南下した後に西側に曲がり、川島本町山田遺跡の南側の部分に至る。

川島本町山田遺跡のある山田郡は現在でも条里地割が良好に残っている。天平7（735）年の年号が記載されている日本最古の田図である『弘福寺領讃岐国山田郡田図』には地割と考えられる方格線が描かれているが、まだ条里制の呼称は記載されていない。その後の天平宝字7（763）年讃岐国山田郡弘福寺田内校出田注文には条里呼称が記載されている。いずれにしても8世紀前半段階で当該地に条里制が施行されていたと考えられるが、これ以降現代に至るまで、決して同じ規模・位置ではないが、条里地割を維持しているのである。空港跡地遺跡や三谷中原遺跡など高松平野の遺跡では条里地割を反映する構造遺構が発掘調査で確認されおり、調査成果の蓄積とともに各時代ごとの条里地割の状況が明らかになりつつある。

〈参考文献〉

- 『県道西植田高松線道路改修に伴う発掘調査報告 川島本町遺跡・川島本町南遺跡』香川県教育委員会 2006
- 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 林・坊城遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1993
- 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 前田東・中村遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1995
- 『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 多肥松林遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1999
- 『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 空港跡地遺跡Ⅰ～Ⅷ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1996～2004
- 『香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度 汲伝遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1999

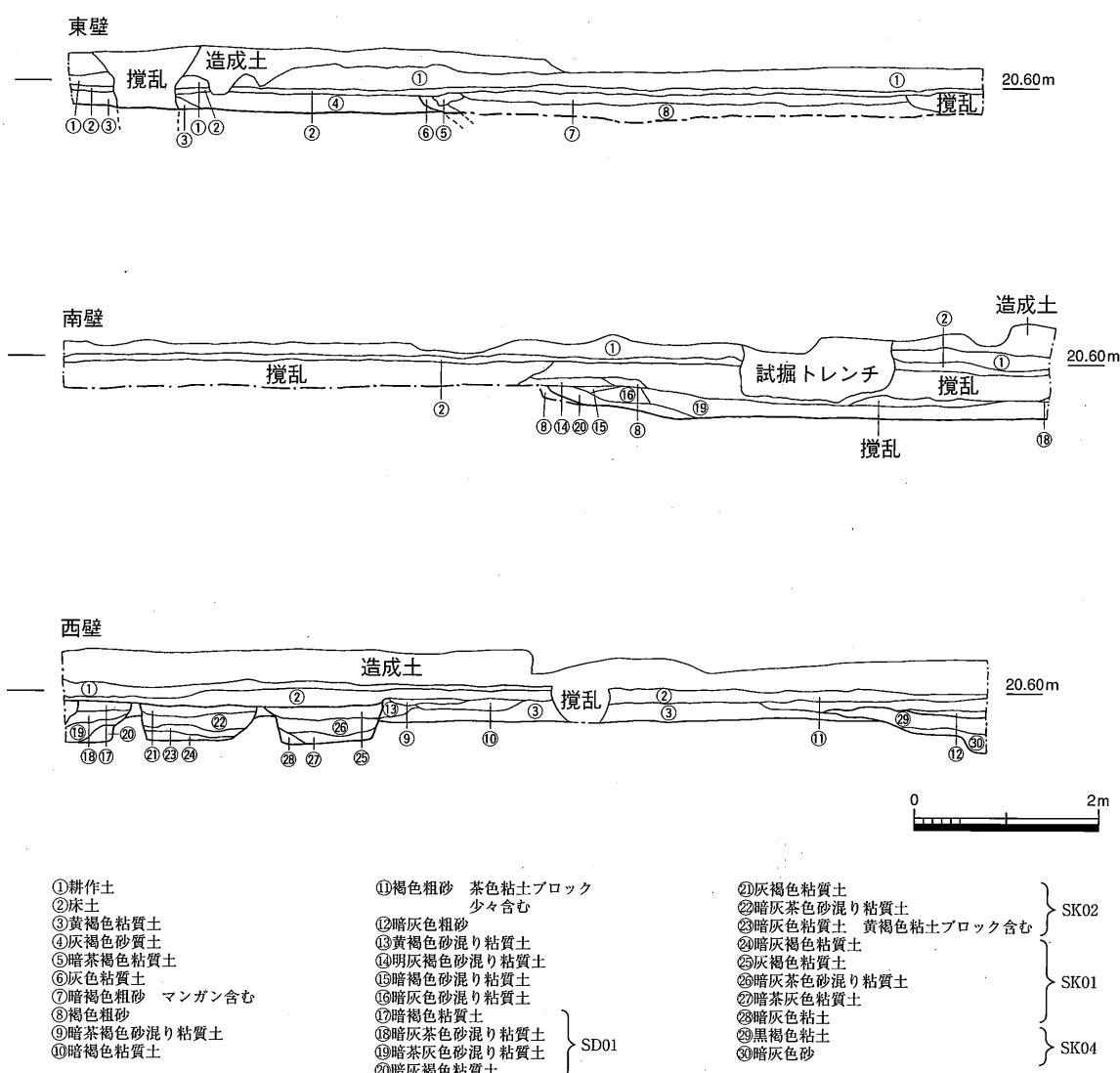
「三谷中原遺跡」『平成14年度埋蔵文化財発掘調査概報』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 2003
『香川県歴史の道調査報告書 第十集 讃岐国往還調査報告書』香川県教育委員会 1993
『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』香川県教育委員会 2003
『久米池南遺跡発掘調査報告書』高松市教育委員会 1989
『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会 1992
『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』高松市教育委員会 1999
『都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡』高松市教育委員会 1997
『太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 凹原遺跡』高松市教育委員会 2001
『高松市川東団地住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 由良南原遺跡』高松市教育委員会 2002
『香川県済生会病院移転新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡(済生会)』高松市教育委員会 2003
『電気通信事業用無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 雨山古墳群 3号墳・13号墳』高松市教育委員会 2005
藤井雄三「高松市雨山南遺跡発見の国府型ナイフ形石器」『香川考古』創刊号 1983
藏本晋司「香川県高松市三谷石舟古墳の再検討」『香川考古』第4号 1995
濱田重人「高松市三谷町矢野面古墳測量調査報告」『香川考古』第6号 1997

第3章 調査の成果

第1節 調査区の概要と土層序

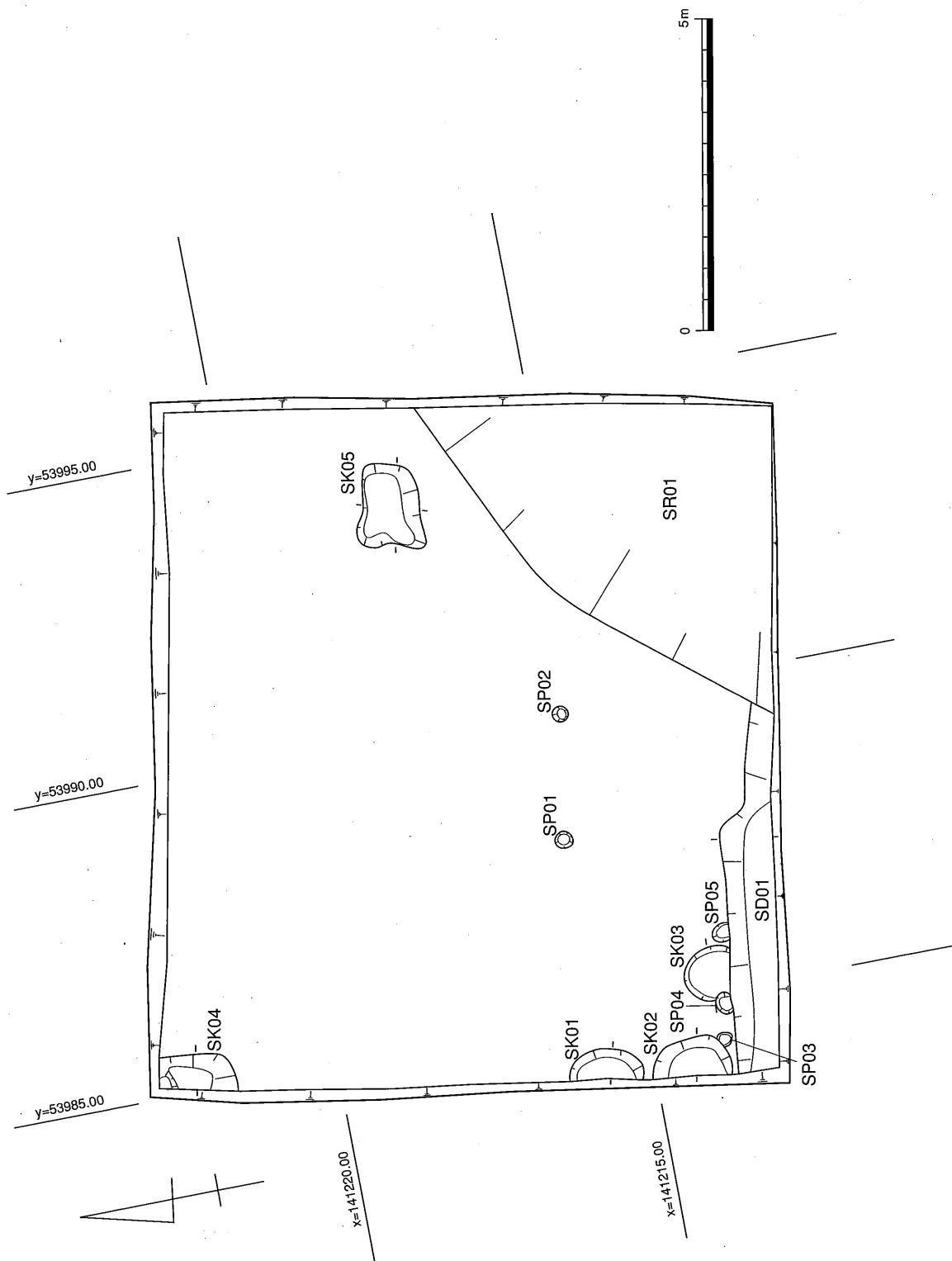
調査区は平地の道路際に位置する宅地の跡地で、調査対象面積は196m²と小規模な調査区である。家屋の基礎が残存していたため、調査区の南部や北東部を中心に搅乱を受けている部分がある。調査前には宅地の造成土が残っており、造成土を除去すると宅地以前の耕作土（昭和30年頃）が確認できた。この耕作土と床土の直下で黄褐色～灰褐色系の粘質土と部分的に砂質土からなる基盤層に至る。この基盤層は春日川の旧河道による氾濫と南西側の開析谷からの堆積により形成されており、基盤層上面から0.3mほど掘り下げると灰褐色細砂層に至り湧水する。現在でも調査区の一帯では井戸を使用している住宅が多いことからも、基盤層の下部には豊富な水量があることがわかる。

この基盤層の上面から遺構が掘り込まれている。遺構面は標高20.5m前後で、全体的に平坦である。床土と基盤層の境界付近には攪乱されていたり、マンガンなどが沈着していたため、基盤層の上面をやや掘り下げて遺構を検出した。そのため遺構の深さは本来の深さより浅くなっている部分がある。



第20図 調査区土層断面図 (1/80)

第21図 遺構平面図 (1/200)



第2節 遺構と遺物

土坑

SK01（第22図）

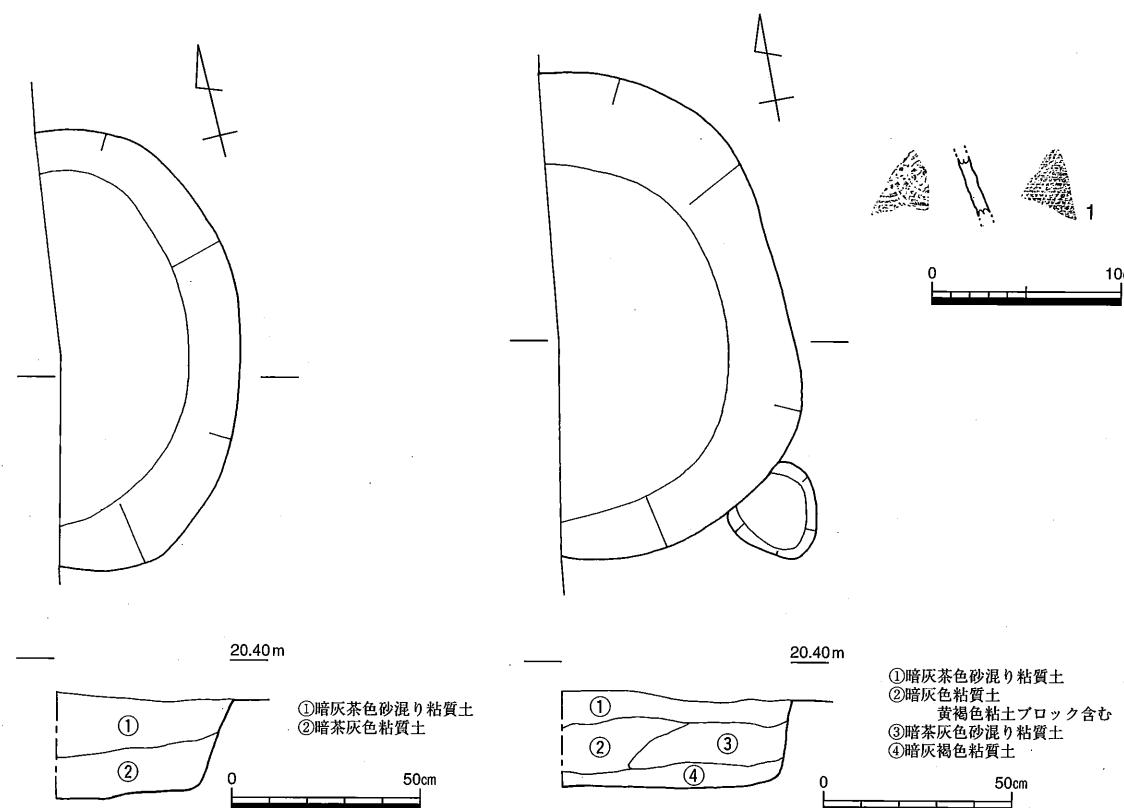
調査区南西部の西壁際で検出した土坑である。土坑の西側は調査区外のため全体の平面形は不明であるが、検出部分の形状から橢円形に近いものと思われる。検出部分で南北方向の直径1.18m、深さ0.28mである。調査区西壁土層断面によると、本来の深さは0.41mになる。掘り込みの傾斜は比較的急で、底部は東から西に向かって緩やかに下っている。埋土は暗灰茶～暗茶灰色の粘質土が主に堆積している。

古代と考えられる須恵器・土師器・黒色土器の細片が僅かに出土している。

SK02（第22図）

調査区南西部の西壁際でSK01の南側に隣接して検出した土坑である。SK01と同様に坑の西側は調査区外のため全体の平面形は不明であるが、検出部分の形状から橢円形に近いものと思われるが、東側の部分は直線的になっている。検出部分で南北方向の直径1.30m、深さ0.26mである。調査区西壁土層断面によると、本来の深さは0.38mになる。底部は平坦になっている。埋土は暗灰茶～暗茶灰色の粘質土が主体となっているが、下部には黄褐色粘土ブロックが混ざっている。

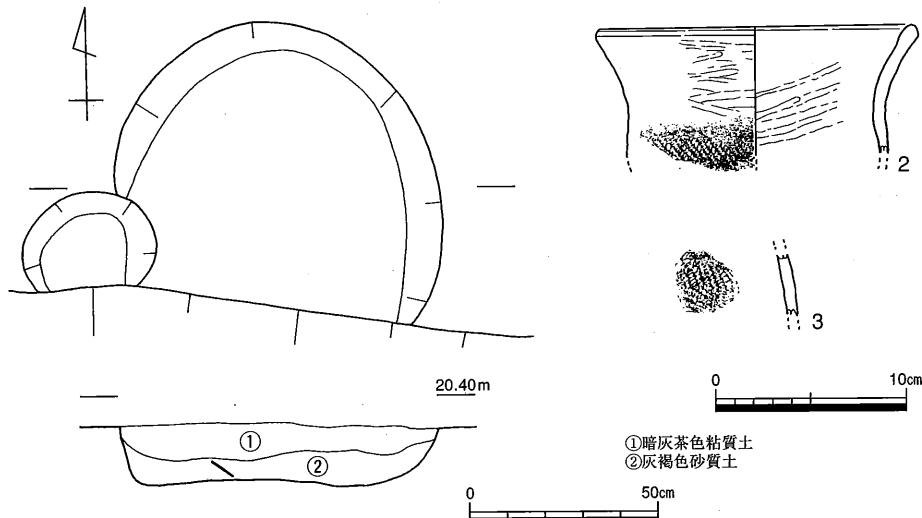
1は須恵器の甕の体部である。外面にはタタキの後にカキ目を施している。内面の当て具痕には車輪文が認められる。この他には古代と考えられる須恵器と土師器の細片が僅かに出土している。



第22図 SK01平・断面図（1/20）、SK02平・断面図（1/20）、SK02出土遺物（1/4）

SK03 (第23図)

調査区南西部で検出した土坑で、南側をSD01によって壊されている。検出部分から全体形は円形と考えられる。検出部分で直径0.85m、深さ0.16mである。底部は中央部分が若干高くなっている。埋土は上下2層に大別され、下層の灰褐色質土から土器が出土している。

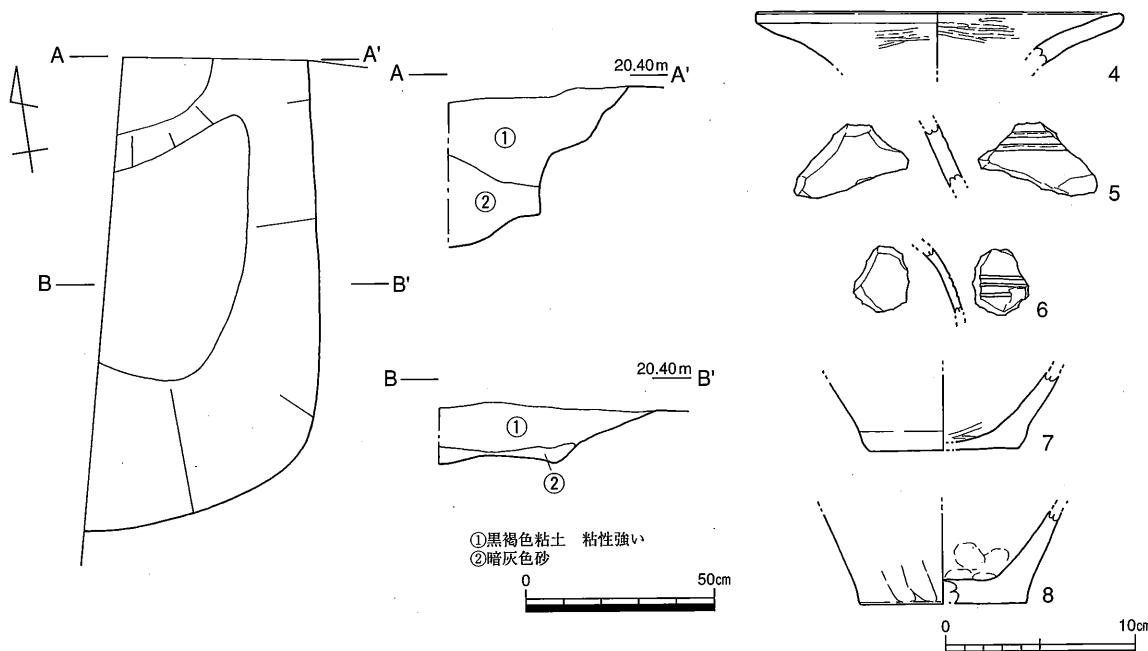


第23図 SK03平・断面図 (1/20)、出土遺物 (1/4)

2は縄文土器の深鉢である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸くなっている。内・外面上にはヘラミガキを施している。体部には縄文を施している。3も縄文土器の深鉢の体部で、内面上にはヘラミガキを施している。外面には縄文を角度を変えて2単位施している。また破片の上部には僅かにナデたような痕跡があり、縄文を磨り消している可能性がある。この他に縄文土器の体部の細片が少量出土している。

SK04 (第24図)

調査区の北西隅で検出した土坑で、北側と西側は調査区外になるために全体形は不明である。検出部分では方形であるが、南側は丸みを帯びている。検出部分で南北方向1.25m、東西方向0.58m、深さは



第24図 SK04平・断面図 (1/20)、出土遺物 (1/4)

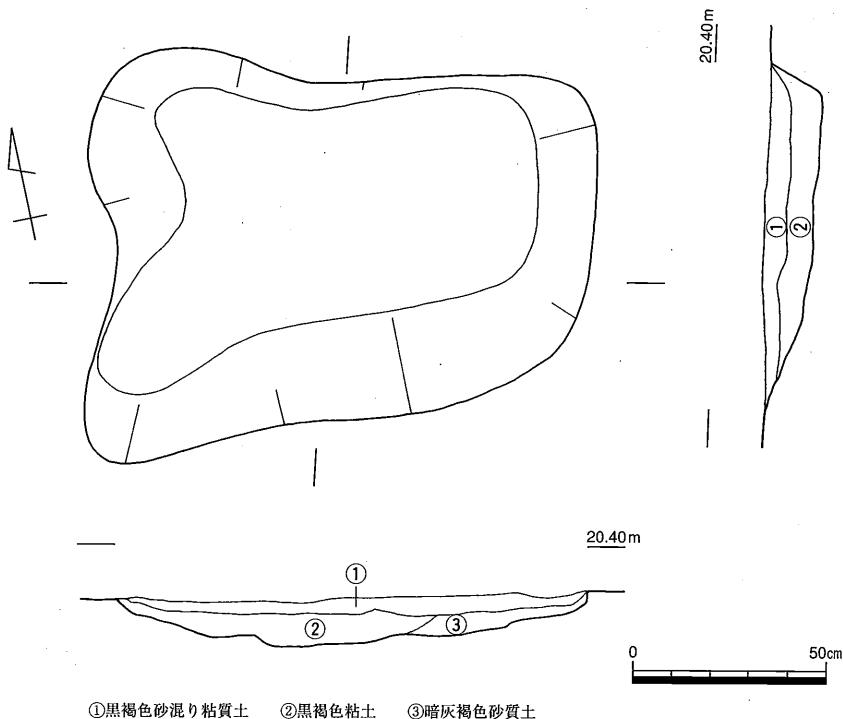
最深部で0.40mである。掘り込みは全体に緩やかであり、底部は南側から北側に向かって緩やかに下った後に、北西隅で急激に深くなっている。埋土は上層に粘性の強い黒褐色粘土が堆積しており、下層は一段深い部分を中心に暗灰色砂が堆積している。遺物は下層の暗灰色砂層から出土している。

4は壺の口縁部で、大きく開いている。内・外面にヘラミガキを施している。5・6は壺の体部で、外面にヘラ描沈線を巡らせてている。7・8はともに壺の底部と考えられる。7の底部内面には棒状工具の先端でナデたような痕跡があり、ヘラミガキのようになっている。

SK05 (第25図)

調査区の東側で検出した土坑である。平面形は不整形な方形で、南西部部分が突出しており、西側部分は湾曲している。東西方向の長辺1.34m、南北方向の短辺0.85～1.08m、深さ0.14mである。底部はやや凹凸がある。埋土は基本的に上層に黒褐色砂混じり粘質土、下層に黒褐色粘土が堆積しており、上層には黄褐色粘土ブロックを含んでいる。

遺物は弥生土器の体部の細片が2点出土している。土器の胎土はSK04出土遺物と似ている。

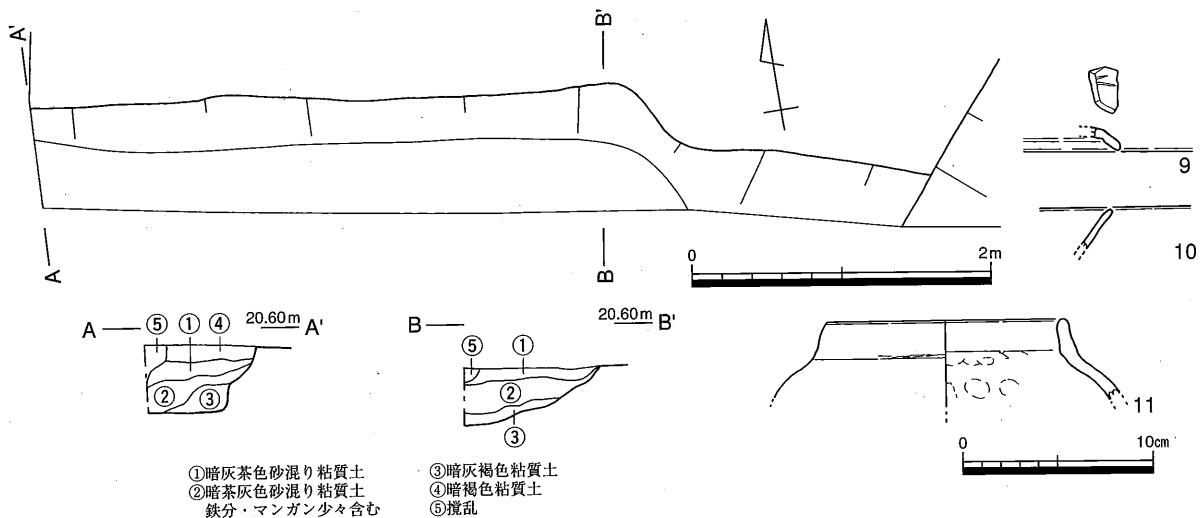


第25図 SK05平・断面図 (1/20)

溝状遺構

SD01 (第26図)

調査区南壁際で、南壁に沿って検出した溝状遺構である。南側は調査区外で、東側はSR01によって壊されている。西側はそのまま調査区外に続いて行く。SD01は北側部分だけの検出になったが、全体的に直線的であるが、東側で屈曲する部分がある。方向はN-81°-Wで山田郡の条里地割の東西の方向に合致している。検出した部分で長さ5.9m、幅0.85m、深さ0.40mであるが、西壁土層で復元したA-A'部分で、深さ0.46mである。埋土は暗灰茶～暗茶灰色の粘質土が主体となっている。またある程度埋まった段階で再掘削しており、SD01の維持に努めている様子である。また検出部分の幅を考えても本来は2m前後の幅があったものと思われ、大型の溝状遺構であったと考えられる。埋土の一部と南壁土層には大きく搅乱の痕跡があり、調査区の南側に隣接する現在の水路を造る際に、SD01の南半分も壊されているようである。



第26図 SD01平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

9は須恵器の杯蓋で、外面にヘラ記号が施されている。10は須恵器の杯の口縁部である。11は須恵器の短頸壺で、口縁部は短く直線的に内傾しており、端部は丸く收めている。この他に古代の須恵器・土師器・黒色土器が出土している。遺物の時期は9世紀前後から11世紀前後までの時期幅がある。先述したようにSD01は再掘削をしながら管理されていたが、11世紀前後には埋没したと考えられる。

自然流路

SR01

調査区の南東部で検出した自然流路である。南西一北東の向きで、西岸を検出したにとどまる。上面には暗褐色粗砂や褐色粗砂が堆積している。一部を掘削したが粗砂層が続き湧水する。調査区の壁面が崩壊する恐れがあるため底部まで掘削していない。近世～近代の遺物が僅かに出土したにとどまる。

第4章 まとめ

遺構の変遷

〈縄文時代後期〉 SK03

SK03は川島本町山田遺跡での唯一の縄文時代の遺構で、出土土器から縄文時代後期の所産と考えられる。本遺跡から200mほど南に位置する川島本町遺跡で縄文時代後期の遺構や、包含層から縄文時代後期の土器が比較的多く出土している。川島本町山田遺跡では包含層から縄文土器は出土しておらず、遺跡全体の縄文時代後期の土器の出土量からも集落の中心は川島本町遺跡にあり、川島本町山田遺跡は縄文時代後期の集落の縁辺部にあたるものと考えられる。しかし、県下でもまだ資料的に少ない縄文時代の遺構・遺物が出土したことは注目されるものである。

〈弥生時代前期〉 SK04・SK05

SK04は調査区の関係で全体を検出出来なかつたが、遺物の出土量は川島本町山田遺跡の中で最も多



第27図 高松平野東部の条里地割と周辺遺跡（1/20,000）

い。出土土器から弥生時代前期後半の所産と考えられる。SK05は出土遺物は細片が僅かに出土したにすぎないが、胎土はSK04出土のものと酷似している。またSK05の埋土はSK04と同様に黒褐色粘土で、他の遺構の埋土と明瞭に異なっている。

〈平安時代〉 SK01・SK02・SD01

SD01は一部を検出しただけであるが、その方向はN-81°-Wで山田郡の条里地割の東西の方向に合致している。川島本町山田遺跡の位置する高松平野の南東部は現在でも条里地割が明瞭に残存している地域である。古代においても川島本町山田遺跡の約217m(2町)ほど北側に東西方向に推定されている南海道を中心に条里地割が施工された地域である。川島本町山田遺跡の周囲は春日川の氾濫や旧河道によって現状で条里地割が認められなかつたり、また乱れている部分が多い。このようななかでSD01を検出した位置は、先学諸氏の復元⁽¹⁾に準拠すると山田郡5条7里22坪と27坪の坪界に相当し、調査区は27坪部分である。平安時代の山田郡の条里地割の一端を示す資料として重要である。

*第27図は森下友子「三谷中原遺跡」『平成14年度 埋蔵文化財発掘調査概報』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2003 p 8の第6図に加筆して引用した。

(1)高重進「弘福寺領山田郡田図の集落とその比定」『史学研究』55号 1954

福尾猛市郎「『讃岐国山田郡弘福寺領田図』考」『社会科教育歴史・地理研究論集』1957

後に『日本史選集』福尾猛市郎先生古稀記念会 1979に再録

米倉二郎「庄園図の歴史地理的考察」『広島大学文学部紀要』12号 1957

金田章裕「条里と村落生活」『香川県史1 原始・古代』香川県 1988

金田章裕「高松平野の条里と弘福寺領讃岐国山田郡田図」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会 1992

金田章裕「高松平野における条里地割の形成」『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』高松市教育委員会 1999

遺物観察表・土器

報文番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調・外	色調・内	調整・外	調整・内	胎土	報告書標名	備考	
1	須・壺	—	—	—	—	細片	灰N6/	タタキ後力ギ目	当具痕	微・少	SK02	車輪文の当具痕	
2	繩・深鉢	16.2	—	—	1/8	にぶい黄澄10YR7/3	にぶい黄澄10YR6/4	指押さえ、ヘラミガキ、縄文	マメツ、ヘラミガキ	細・普	SK03		
3	繩・深鉢	—	—	—	—	細片	にぶい黄澄10YR7/2	にぶい黄澄10YR6/3	縄文、ナデ	ヘラミガキ	細・普	SK03	
4	弥・壺	19.0	—	—	1/8	灰白10YR8/2	にぶい黄澄10YR7/3	ヨコナデ、ヘラミガキ、ナデ	ヨコナデ、ヘラミガキ、ナデ	細・普	SK04		
5	弥・壺	—	—	—	—	細片	にぶい黄澄10YR7/2	浅黄澄10YR8/3	ナデ、ヘラ描沈縄2条	ナデ	細・普	SK04	
6	弥・壺	—	—	—	—	細片	灰白10YR8/2	黒N1.5/	ナデ、ヘラ描丸縄3条	ナデ	細・少	SK04	
7	弥・壺	—	—	—	7.8	1/4	灰黄褐10YR6/2	褐灰10YR4/1	ナデ、マメツ	指押さえ、ナデ	中・普	SK04	
8	弥・壺	—	—	—	8.6	1/4	灰白10YR8/2	灰黄褐10YR6/2	ナデ、板ナデ、ヨコナデ	指押さえ、ナデ	細・普	SK04	
9	須・杯蓋	—	—	—	—	細片	灰白N7/	灰白N7/	回転ナデ	回転ナデ	微・少	SD01	外面にヘラ記号
10	須・杯	—	—	—	—	細片	灰N6/	回転ナデ	回転ナデ	微・少	SD01		
11	須・壺	12.4	—	—	1/8	灰5Y5/1	灰5Y5/1	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	細・少	SD01		

家の浦遺跡

図版1



調査前遠景 南から



調査前遠景 北東から

図版2



1区全景 北東から



1区中央全景 東から



1区西側 SD01検出面全景 南東から



1区西側全景 南から

図版 4



1区中央遺構検出状況 手前SB01・SK01、向う側SB02・03 北東から



1区SD01完掘状況 南から

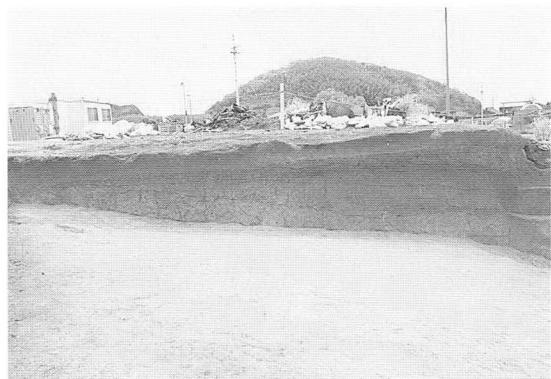
図版 5



SD01 断面 B-B' 北から



SD01 断面 C-C' 北から



1区西側土層断面② 北から



2区中央土層断面⑤ 南から



2区東側全景 南から

図版 6



2区中央全景 南東から



2区中央全景 北東から

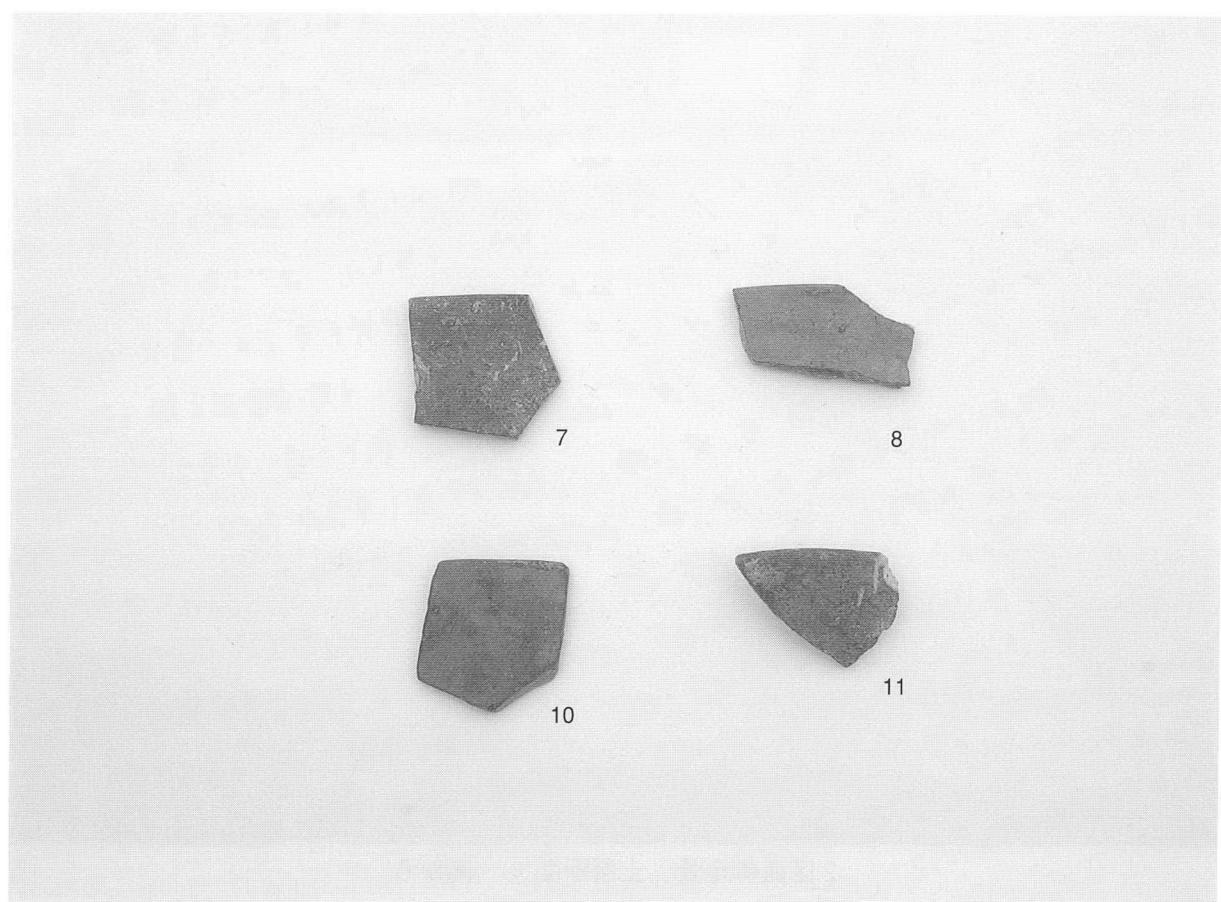
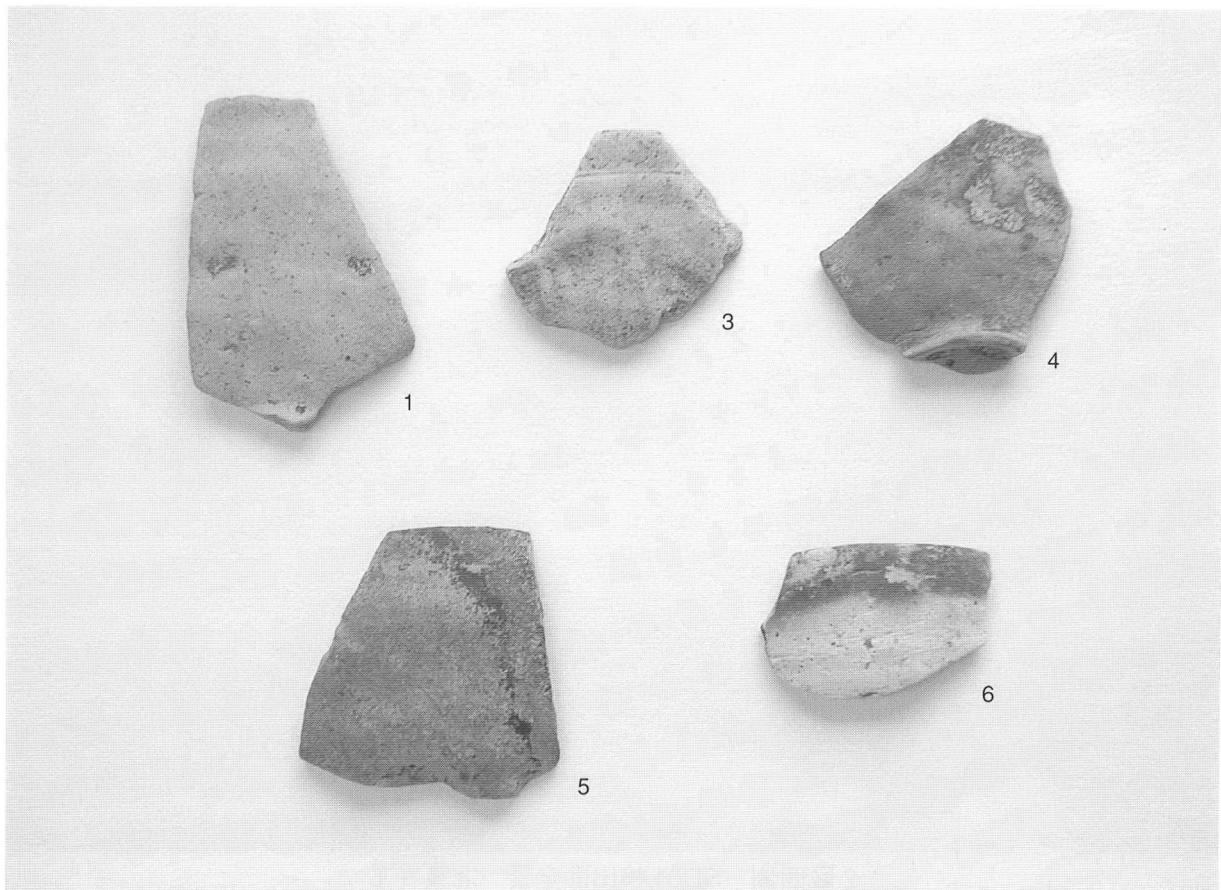


2区西側 SD01検出面全景 北東から

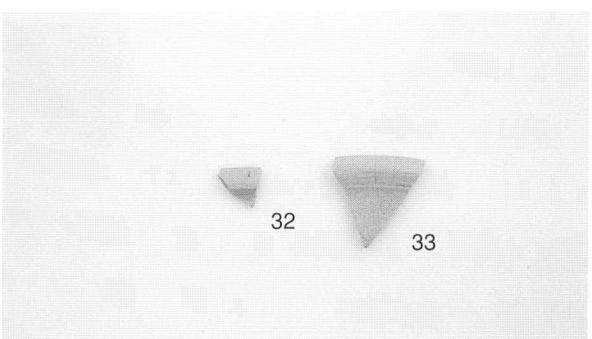
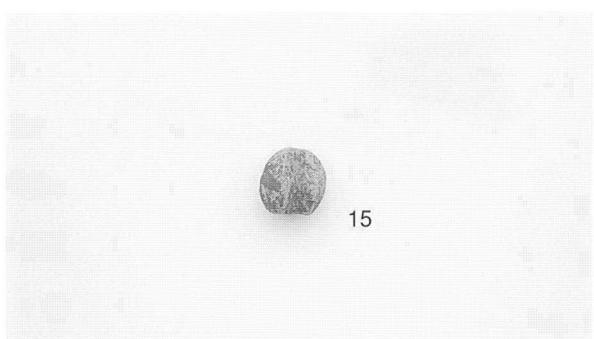
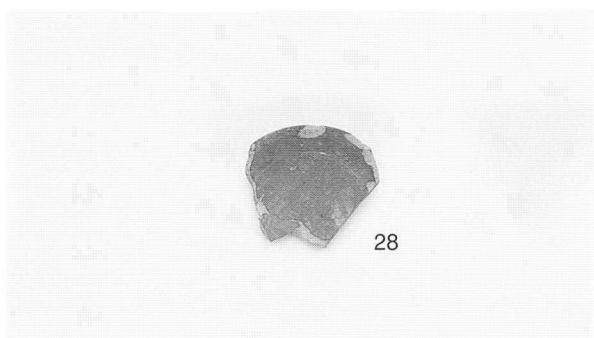
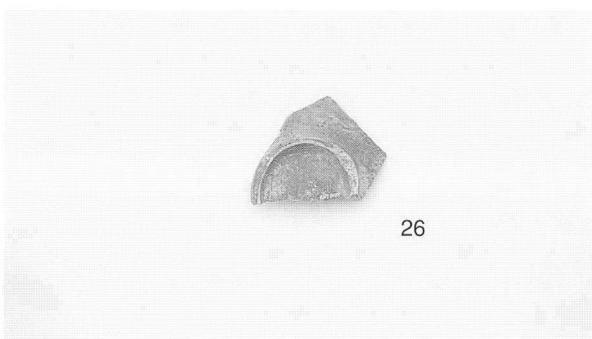
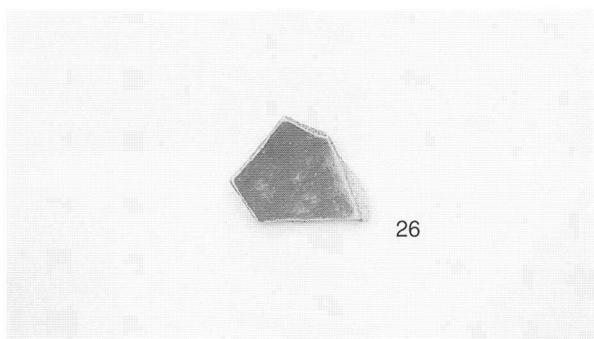
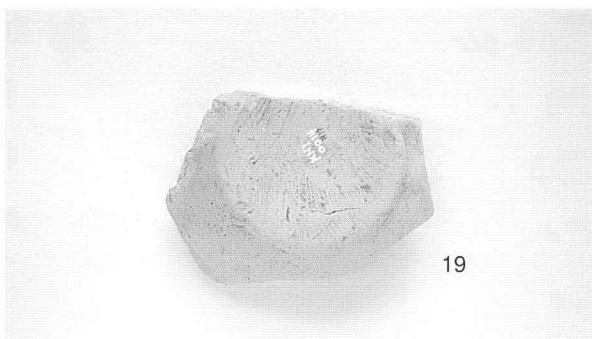
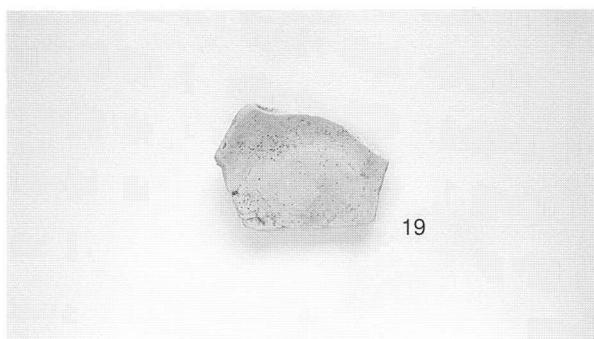
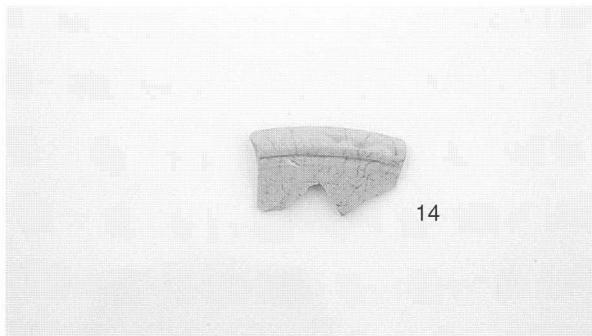
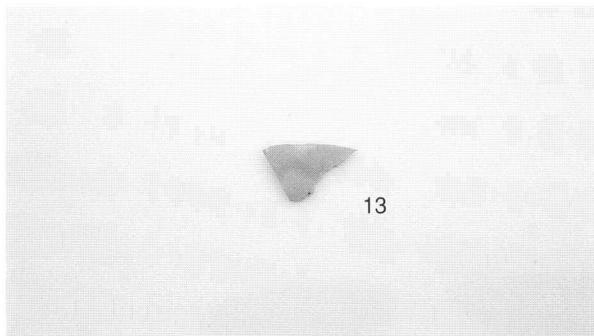


2区西側全景、土層断面⑥ 南から

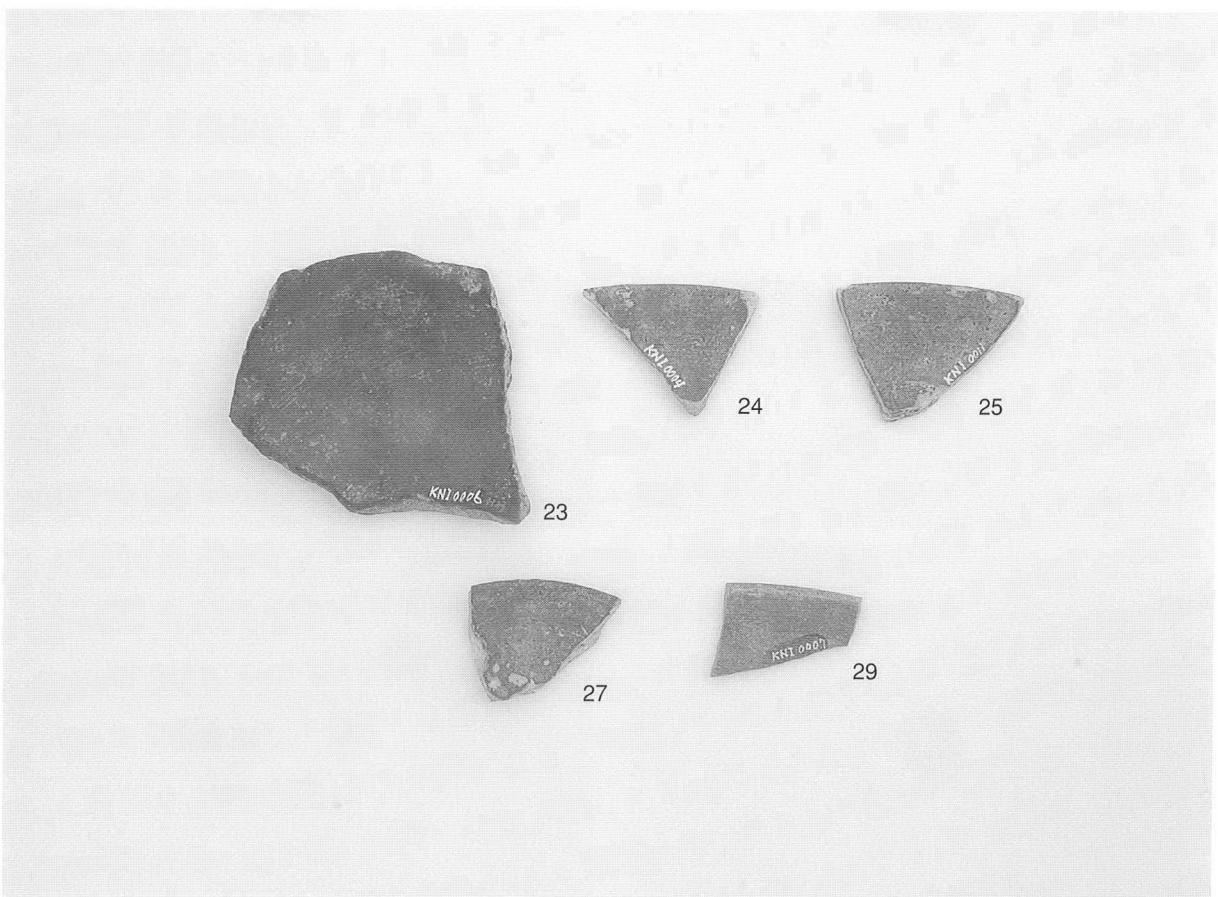
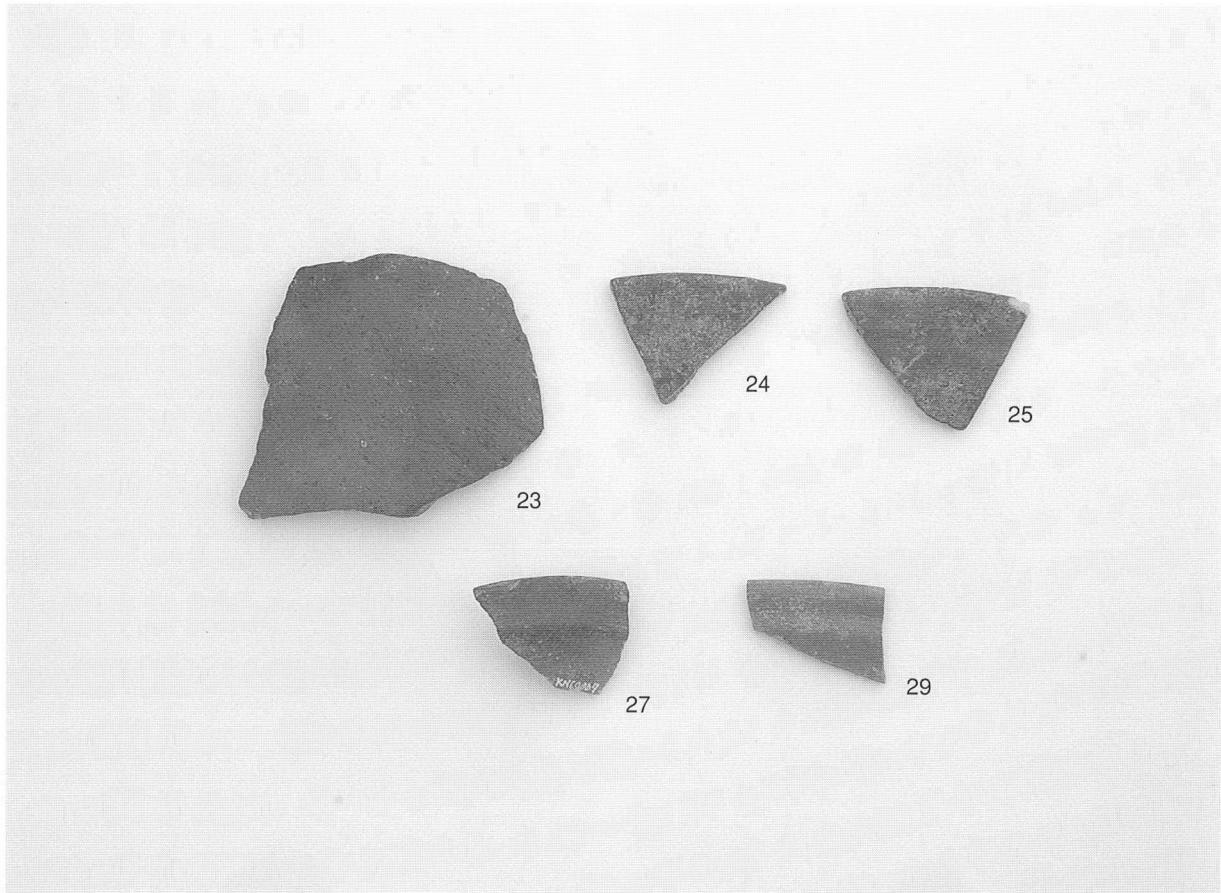
図版 8



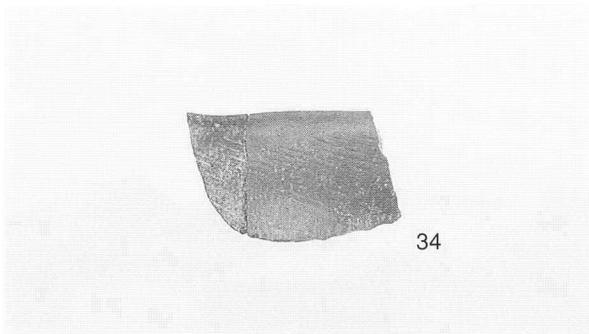
図版9



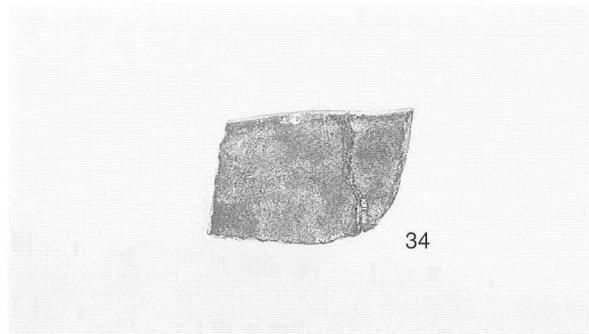
図版10



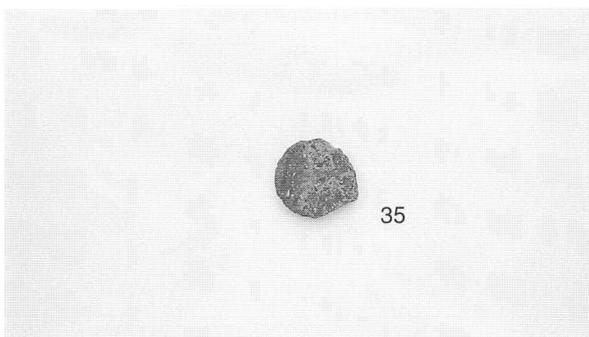
図版11



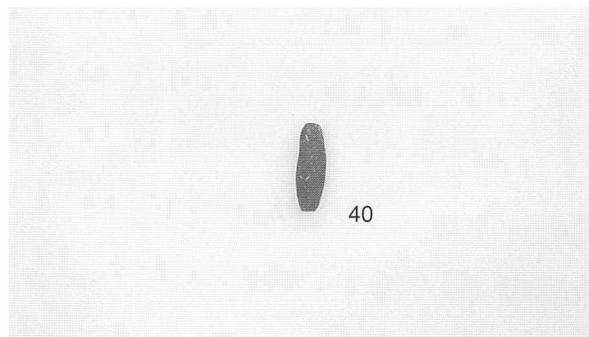
34



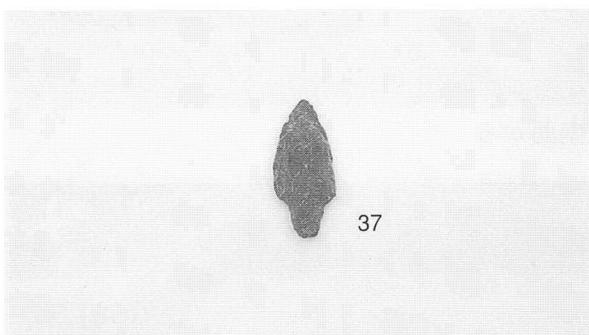
34



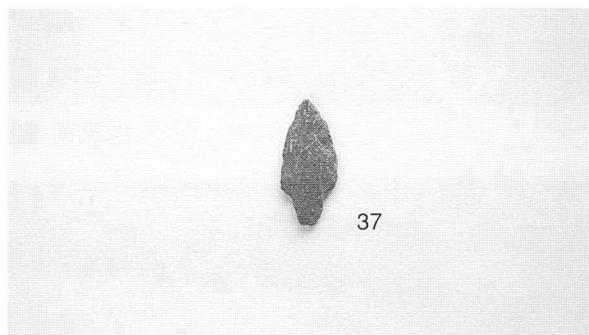
35



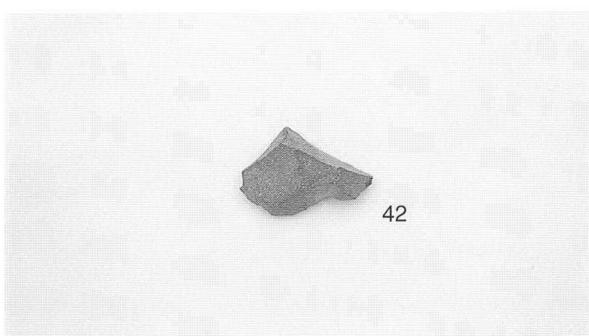
40



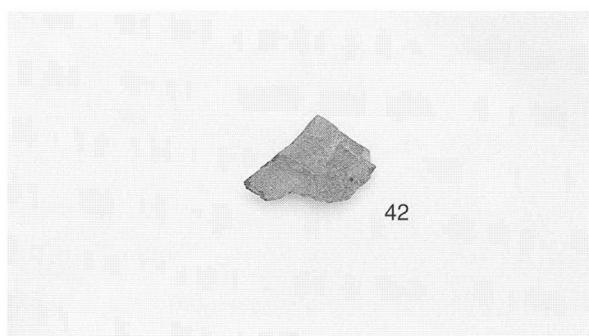
37



37



42



42

川島本町山田遺跡

図版12



調査前遠景 南西から



調査区全景 東から

図版13



調査区全景 北から



SK01～03完掘状況 南東から

図版14



遺構検出状況 東から



SK02断面 西壁部分 東から



SK04断面 B-B' 南から



SD01断面 B-B' 東から



SD01完掘状況 東から

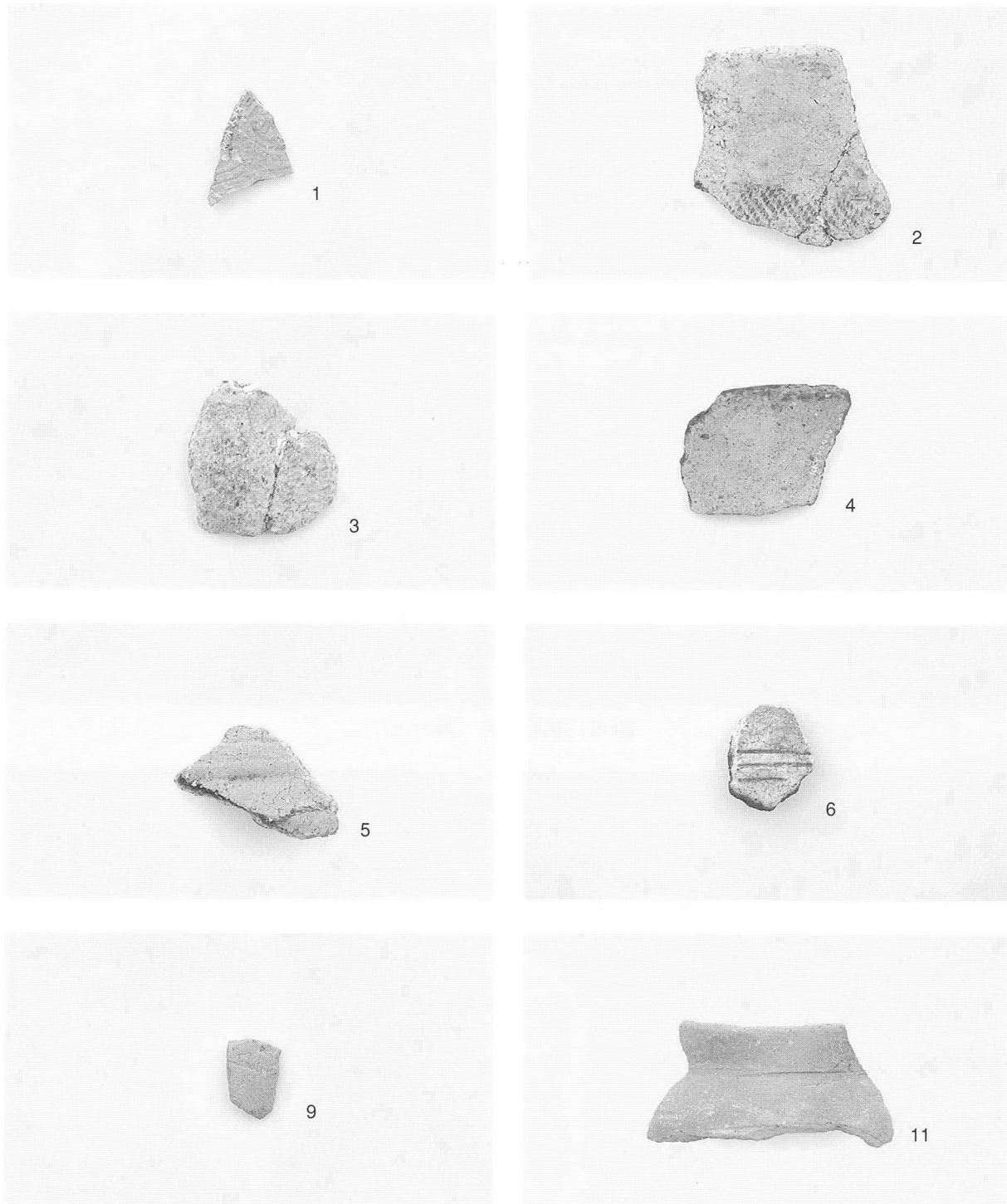


SD01 完掘状況 西から



SK04 完掘状況 北から

図版16



報告書抄録

ふりがな	いえのうらいせき・かわしまほんまちやまだいせき							
書名	家の浦遺跡・川島本町山田遺跡							
副書名	県道大浜仁尾線道路改良事業及び県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	森 格也							
編集機関	香川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4 TEL 0877-48-2191							
発行機関	香川県教育委員会							
発行年月日	2007(平成19)年3月30日							
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数	付図枚数	CD-ROM枚数
67P	14P	34P	3P	16P	27枚	58枚	0枚	0枚
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °, ′, ″ (世界測地系)	東経 °, ′, ″ (世界測地系)	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いえ うらいせき 家の浦遺跡	かがわけんみとよし 香川県三豊市 におちょういえ うら 仁尾町家の浦	37208		34° 13' 02"	133° 37' 35"	2006.4.1 ~5.31	916	県道大浜 仁尾線道 路改良
かわしまほんまち 川島本町 やまだいせき 山田遺跡	かがわけんのかまつし 香川県高松市 かわしまほんまち 川島本町	37201		34° 16' 31"	134° 05' 01"	2006.8.1 ~8.31	196	県道西植 田高松線 道路改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
家の浦遺跡	集落	縄文～ 弥生				縄文土器・弥生土 器・石鏃		
		中世	掘穴柱建物跡・土坑・小穴			須恵器・土師器・ 瓦器		
川島本町 山田遺跡	集落	縄文時代 後期	土坑			縄文土器		
		弥生時代 前期	土坑			弥生土器		
		平安時代	土坑・溝状遺構			須恵器・土師器		

県道大浜仁尾線道路改良事業及び県道西植田高松線
道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

家の浦遺跡・川島本町山田遺跡

平成19年3月30日発行

編集 香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4
TEL 0877-48-2191
FAX 0877-48-3249

発行 香川県教育委員会

印刷 太陽印刷株式会社

